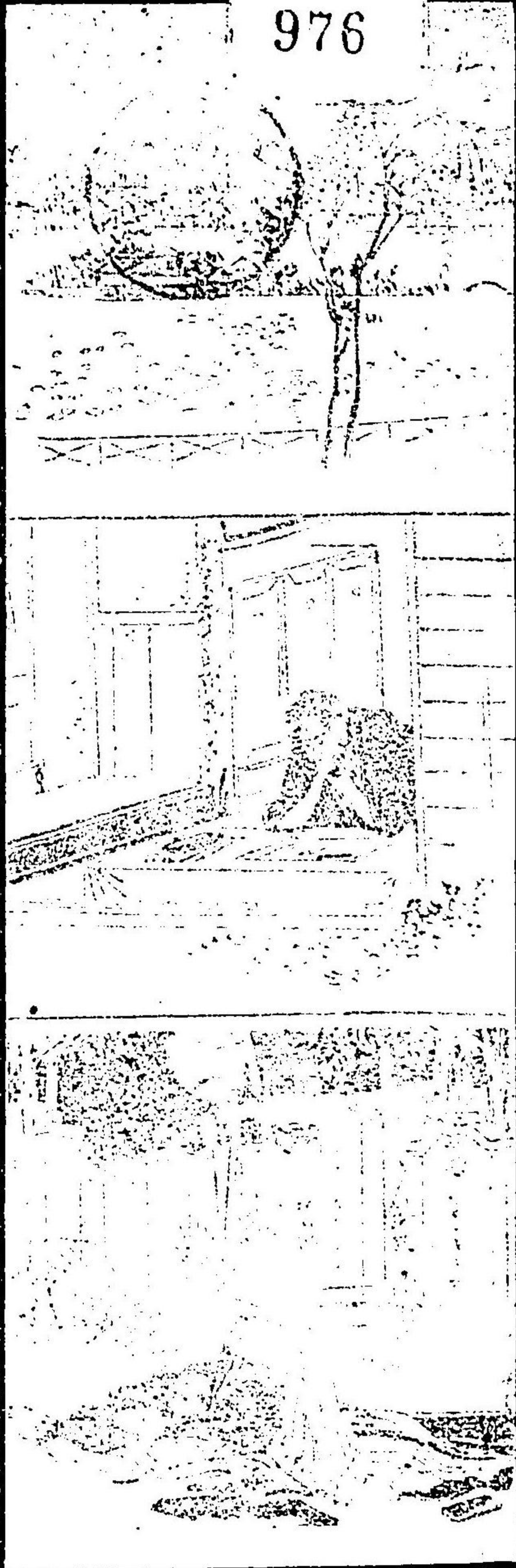
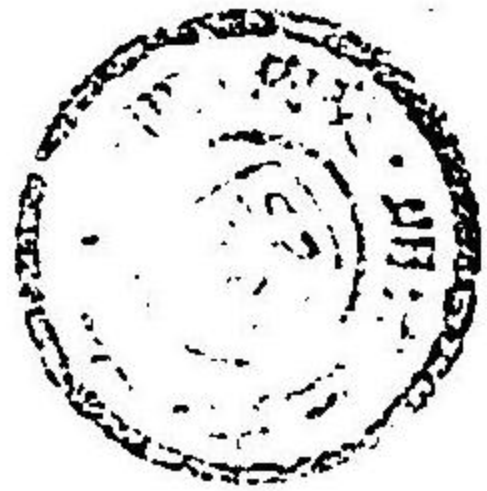


特 9

976

探偵小説第十三集
左 寺



有所權版

緒言

立案新奇にして能く人の意表に出で、讀者をして慄然、惘然、愕然、呆然、身其境に在りて、心其肩に迷ふが如くならしむるは探偵小説に如くものなし。方今感情的小説の流行太甚だしく事實的小説全く形を缺めてより世間人心を活殺する底の奇譚に溺するや久し。此書は専ら這般の需要に供せむが爲に特に脚色の奇絶妙絶拍案三嘆に堪ふべきものを粹撰し平易の文章を以て自在に亂麻の活劇を描き去り、毎號一卷讀切として、騷窓、涼船、涼車、馬車中の好同伴たらんことを期す。去れば其價は及ばむ限り最低額となし、以て讀過一番の後は途上に棄却して些の遺憾なからしめむとす。

春陽堂主人敬白

中學校 師範學校 教科用書
東京英和學校教授松島剛著

近世中地理學

洋裝美本密
需地圖地圖
需法數十枚
入り

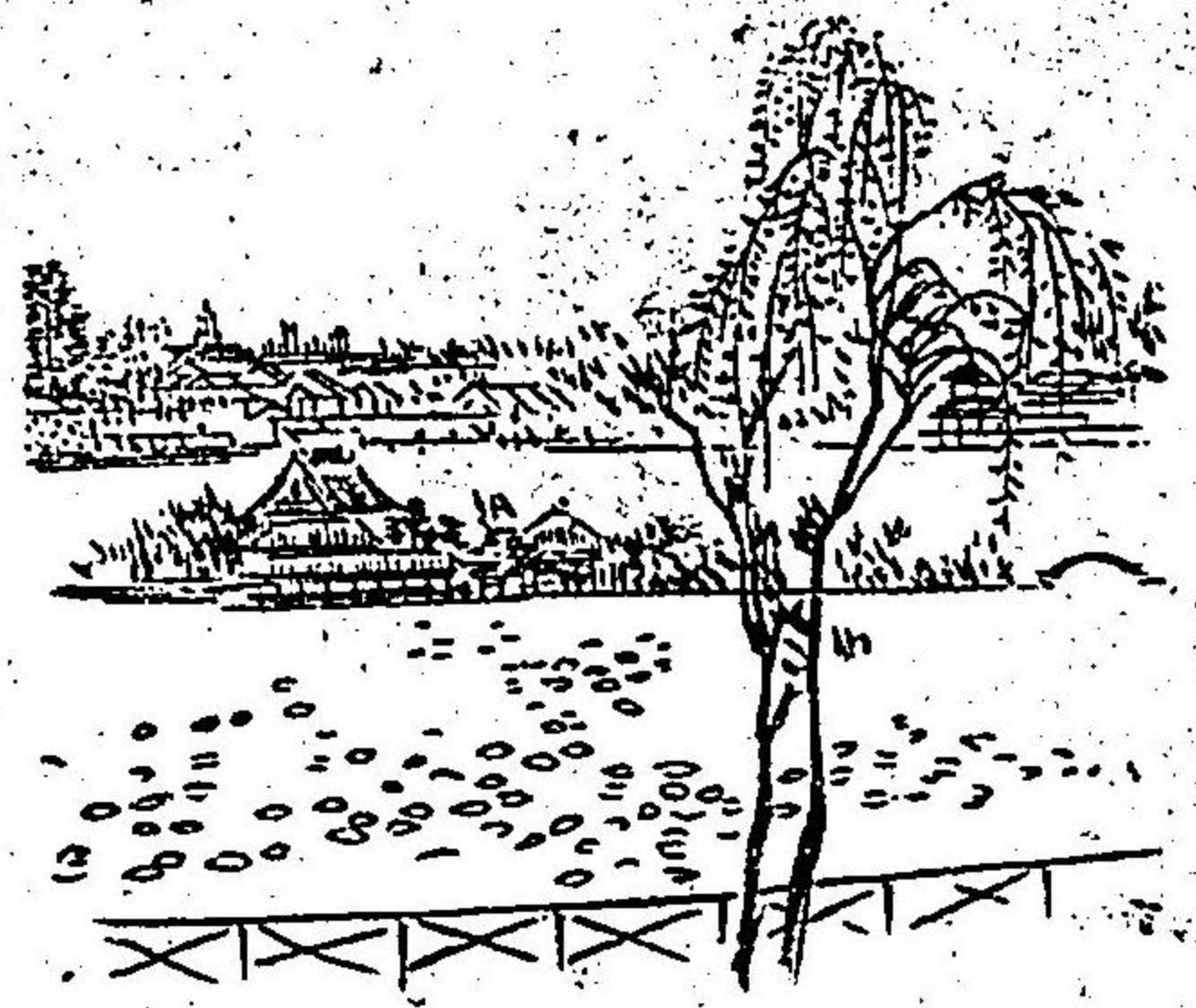
日本之部 二百六十頁 價 八十五錢
外國之部 三百頁 價 八十五錢

本書日本之部ハ廣ク公立諸學校ニ採用セラレ又實業家ノ好考
書トシ世間ノ稱賛ヲ得
外 國 之 部
モ近世地理學ノ著者松
島先生ガ弘ク詳書ヲ添
綴シ深ク中外ノ形勢ヲ觀察シ多年ノ刻苦熟案ニ成リシ者ニシテ
近隣諸國、南洋諸島、濠洲ハ勿論歐米諸國ノ地勢、民情、產物、
交通、貿易、軍備等ノ要項ハ畢テ漏ラサズ殊ニ内外ノ位置、交
通、及貿易上ノ關係ノ如キハ一々之ヲ縷述シテ彼レ此レ相照應
セシメ讀者ヲシテ知ラズ識ラズ海外列國ノ盛衰、及本邦トノ關
係、趨勢ヲ解説セシムルノ妙アリ工業、貿易及殖民ノ將ニ盛ナ
ラントスルノ今日ニ當リ此書ノ出ツル豈偶然ナランヤ

發行所 東京市日本橋區 通四丁目五番地 春陽堂

976

探偵小説のひだりき



ひたりき

その

りの青年、頰骨恐ろしくこけてやけに飛び出したる顎の上なる、亂塔場の
薄ぼなる斑毒を撫でながら、(なあ、蟻村。今日の手術には随分徹へたな)

無聲居士とるす

上野の森に群鴉の聲噪がしく、醫科大學の時計
臺の頂上微かに夕陽の影を止むる夕間暮、どや
くと門外に出で來りし醫學生連。徽章のつき
たる四角形の帽子の裏には、こつは、べるつも
及はざらん腦髓を蓄え、金釦の光輝まはゆきへ
いるの制服に裏まれたる胸の中には起死回生の
術や備はらむ。中にも年嵩と思はるゝ三十はか

といへば、蟻村と呼ばれし男、硝酸の焼痕だらけなる黒羅紗の足衣の隠袋より、鼠色の手拭とり出して霜枯の草のやうなる鼻の下の髯推拭ひて、さうさ、何しろ四時間連続は驚いたよ、それに膿を排泄する度に否な臭氣のするには、實に閉口したね。(併し吾人のやうな事を言つて居ては、逆も學問が進歩しない。如何だ、松村が今日の奮勵は、え、あれでなくちやあ否ないんだぜ)。(さうさ、それに柳田の手術に妙を得たには驚いたね。あんな至難い局所を自由に左の手で開切したには實に驚いたね。教授達も彼の器量には舌を捲いて居たつけよ)。(彼奴はそれに非常な勉強家で、吾々のやうに貴婦人の手術にはかり魂膽を碎いて居るのは事情が違ふからな)。(ところが彼奴に何か出来たといふから面白いて)。(それは嘘談だ、あの君子がそんな事をする理由はない)。(なかつてもあつたのだから詮方がない、對手はといふと恐多くも此の本郷區第一等といふ至極上等無類飛切の美人ださうだ)。(さて種類は何だ、まさか賣人ではあるまい)。(勿論生無垢の令嬢さ、や、

急ぎ候はどに柳田に追付きて候だ、おい好男子、令嬢殺し。これ柳田)と呼かけられて、呼んでるのは僕の事かど、いと嚴格に振向きしは今の噂の柳田政雄といふ醫學士なり。
政雄とし二十五歳、眉秀で鼻隆し他を見る眼元に得も言はれぬ愛嬌あり。口元の締りてへの字形なるは神経質なる事を現はしたれど、その外には東洋流の好男子たるを妨ぐる點もなし。
政雄の眞面目なるが面白しとて、蟻村其他が種々と冷諷うに、政雄はいたく蒼蠅しとは思へども、無下に怒りもされず善きやうにあしらひながら打伴れて歩く中、はや蟻村が下宿の前まで来りしに、蟻村は伴れ立ちたる人々に遊んで行けど勸むるに、皆々その意に従ひしかど、柳田のみは用事あれはと断れば、蟻村は(柳田、自家で誰人か待つてゐるんだらう。おい、明日は思ふさま奢らせて遣るぞ)と氣も輕ければ心もかろく、脚元かろく家内に入りぬ。

朋友に別れて柳田は己が下宿と定めたる森川町のさる下宿屋に立歸れば、營業に拔目なき女主が、柳田さんの御歸宅だよ、あの十六番へ火が行つてゐるかえ。分らないのかえ、柳田さんの御座敷へさ、と喋々しきまでの愛嬌を後に残して、自己が座敷に入り見れば、薄暗きらんぶの灯影に照られて眼に入るは、二通の手紙なり。

柳田は一通を取り上げて讀み了り、ふむ、叔父様が御出京なすつたのか、「午後七時頃より御來訪有之度」としてあるが、宿は矢張谷中か知らん。さうだ谷中の彼お竹といふ婦人は如何も嗜好の好かない婦人だ、叔父様も彼様なものを妾にするといふのは、一舛間違つて御在だ、今夜行つたらさう申上げて見やうか。と獨言して他の一通を取上げ見て、思はず微笑を面上に滲え、なにく、「八時頃までは是非是非池の端半瓢亭まで御はこびのほどを願ひまゐらせ候……」。こりやあ風野の乳人の筆だな、乳人には惜いほどの能筆だよ、だからお文嬢もあれほどまでに進歩たのかも知れない。そ

ればさうと最う七時には間もあるまい、飯でも食つて徐々出掛ける事とまやうかな。

その二

谷中初音町の奥まりたる所に、綺羅を盡せしとはあらねど、先は賤しからず住做じたる一軒の住居あり。奇麗に拭き込んだる御誂の井一格子上、御神燈のぶら下るべきあたり、打付けたる當時流行の陶器の標札の表面、曲木竹と讀まれたり。これなん柳田政雄が叔父重藏が愛妾の住居にて、都に上れるその折々の宿泊處と定めたる所なり。

柳田重藏といふは羽前の國山形の豪商にて、奥羽七州にても屈指の分限、七戸前の土藏何れを見ても株券と公債證書が一杯どの近隣の評判を十分に聞いても、中々に小さからぬ身代。寐轉ではかり居ても金が金産む身上なれど、怠惰けて居ては商賣冥利に堪ざる恐怖ありと、仕入向も他人手に

任せて、大將自身采配を取つての御出馬、毎月に幾度といふほどの出陣には、足溜の陣所なくては不自由なりと、さてこそ斯る家をは設けしなれ。この道はかりは違つたものにて、寐ても寤めても勘算にのみ心を碎く重蔵も、旅寐の空の寂しき折から、一人御召抱遊はしては如何さま、その方が却つて御格好で御坐いますからと、勸むる者のあるに任せて、成る程それもさうかと二三天作から割出して、留守居役兼お局役に雇入れしは則ち前のお竹の方。

重蔵は道中の垢を洗湯にさつと流して、御寵愛のお竹に酌を取らせ、晩酌三杯の酒に玉山陶然として頹れかゝる折、入り来りしは甥の政雄、或や政雄かよく来て呉れた、久しく逢はなんだが、異状もないか。うむ、それは結構だ、學問をするには何でも身軀が一番大切だ。自己か、自己は最う何時もこの通びんくして居る。自宅の方でも誰人も變るものもない、お花か、彼嬢も成長うなつてな、小學校を卒業してからは、高等女學校とやら

へ行つて居るが、いや六かしい事を覚えて来ては私を困らしてならんよ、ハ、ハ、ハ、とわが思ふ事のみを辭急しく饒舌り立て居たりしが、須臾ありて愁然と政雄が面上を打見やり、政雄、和郎は幾年になつたわけの、うむ、二十四か。早いものださうなつたかの、學問も嘸上達した事であらうが、見た所も實に立派な男になつた。斯様な立派な男になつた所を、和郎の亡つた兩親に見せたなら如何程か喜ぶ事であらふに、あゝ残念な事をした、證めては最う十四五年も活かして置きたかつたが、壽命なればそれも詮方がないか。やれく久しよりで逢つたのに、詰らぬ事を言ひ出して、談話を大なし濕つほくして仕舞つた。併し政雄、今日和郎を喚び出したのは、和郎に逢う計りではない、他に少許相談したい事があるんだが、如何だ相談に乗つてくれる氣はあるまいか(政)それは生涯御厚恩になつて居りまする叔父様の仰言で御在ますもの、身に適ひまする事なら如何様な事でも(重)聞いて呉れるか、それは難有い、實は縁談だ(縁談?)へえ、それは

誰人様の(和郎の)私(叔父さん、御冷弄なすつては否けません)冷弄
 弄(冷弄)ではない、全く眞實だ。我家の花を貰つて呉れる理由には行くまいか
 (政へえ……)一人子一人で育つたのだから、些少は我儘かも知れないが、自己には可愛
 くつて可愛くつて堪らないのだ。それで氣の知れぬものを貰らつては、自
 己でもない後は如何な事がないとも言はれぬと思へば、案じられてならな
 いが、此處だて、政雄、和郎に相談したいといふのは、何卒不束な奴では
 あるが和郎が貰つてくれる譯には行くまいか、自己の口から斯様事をいふ
 のは訝しいけれど、田舎者ではあるが兎に角學校へも行つて居るから、多
 少は教育もあるといふもの、な、竹、相應の縁だらうと思ふが如何だ、和
 女は何と思ふ)と熱心なる重藏が語に、側に居たりしお竹は(眞箇に左様
 で御座いますね)と口では云へど、その言の葉の掛々しからぬは、思ふ志
 想を推裏むにやあらん。

それとは覺り得ぬ重藏は尙も語を次ぎて(誰人が見ても不都合な縁ではあ
 るまい、政雄、和郎に異存はあるまいね、これ黙つて居るのは承知の驗か、
 不承知なのか。學問は出来ても一向に小兒だな、婦女子ではあるまいし、
 何もそんなに恥かしがるには及ばない。いよく承知してくれな、やれ
 難有い……)叔父様、さう一人で飲込んでばかり御在なすつては、い
 よく面目ない譯で御座いますが……)それが如何した、まさか厭忌だ
 ふのではあるまいね)さう仰になりましては穴へでも這入りなう御座いま
 すが、此事だけは……)御免を蒙りたいといふのかを(はい)何だ、この
 縁談は否だ、ふむ、和郎は大變に立派な男に御成長だ。自家の娘は田舎者
 で迎も和郎の様な立派な人の女房になれやう筈はない、これは私が悪るか
 つた(叔父様、さう悪く御推察になつては、御申譯が御座いませぬが、全
 くそんな失禮な思量を有つて居るのでは御座いませぬ。御承知かも知れま
 せんが、近い親類同士の結婚の弊害と申しまするものは……)解つたよ、

も淡く幻よりも靡れて、目に見ゆるは彼の叔父上が恐しき憤怒の形相、胸に浮むは同じ人の悲しき言の葉。心は姿の見えぬ悪鬼に掴まれて、歩むともなく歩み來るは何處とも知らぬ耳邊に、恐ろしき物音一聲、驚きて二足三足駆け出せしその一刹那、はじめて吾に返れば、何のとぞ上野の鐘樓の鐘の聲、不忍池水に響き渡りしにて、その身は東照宮の鳥居の前に在りたりき。

今までは胸裏の懊惱煩悶に忘れ居たりし半瓢亭にて待合の事、先方にては八時迄にといへけるものを、今のは九時か十時かと路傍の瓦斯燈に時計を透かし見るに、九時を點しばかりなり。先刻より此身を待かねて怨み詫びてやあるらんと思へば、叔父の事も何もかも打忘れて、駆け出でんとして右手を見れば、こゝは半瓢亭の門前なり。

さても周章てけるよと自から我身を冷笑ふて、門内に入り、斯々の人の來ては居ぬかと尋ぬれば、先刻から大變を御待かね、何卒此方へと女中に導

られて、薄暗き廊下を通り抜けて離座敷に通れば、此方に後背を見せて婦人二人坐り居たり。

御客様が御入來になりましたと捨臺詞を残して女中が立ち去りしに、柳田はすつと這入りて、大變に御待たせ申して濟みませんでしたといへども返辭のなきに、萬一座敷を取違へばせざりしかと、恍然と立居る柳田を睨みつけて、一人の婦人が、柳田さん、他を待せるにも程度のあつたものでございます、眞實に大抵に遊ばせよ。私は最う少刻で御嬢様に取殺されるところで御座いました、私が嘘を吐いたんだらうつて、あれ乳母、そんな事を言つちやあ否けないよ、と恨氣に柳田の方を打見やるは、薄暗き燈火の影にも光らんばかりの令嬢姿、廻らぬ筆にて書き立てるだけが管なるべし。

柳田は頭を掻き、叔父の處へ一寸の積で寄りましたら、思はず長くなりまして、と半分言はせず、乳母のお松は、何處の叔父さんだか知れま

すものか、此方の氣も知らないで遊んで御歩行遊はすとば善い氣な御方。そんな事とも知らないで、私はかりが四方八方氣がねをして、御嬢様を買物に御連申すと拵へて、漸々の苦辛で萬一旦那様にでも知れやうものなら大變だからと、心配遊はす御嬢様を此家まで御件申して、聞いて見れば和郎は未だ御入來がないとの事、それでは私等の方が早かつたか、少刻御待まうしたなら御入來遊はすで御在ましやうからと、耻かしがつて御在遊はす御嬢様を無理に御入れ申して、さあ待つたの待たないので御座いません。御嬢様は遅くなると旦那様へ首尾か悪くなるからと、それはく非常な御心配、私が仲へ立つて嘘でも申し上げたやうに御思量遊はして、最少刻で御歸宅なさる所で御在ました」と疊かけての攻撃に、柳田は面目なけに默然で控かゆる折しも、此家の女中が（おや大層御静寂で御在ますね、御羨花が這入りました）。

立つて行く女中を見送りたる乳母のお松は、やがて柳田に打向ひ（柳田さ

ん、此家は私の朋友の家で、今夜は離座敷の方へは誰人も寄越さない様にしてある筈で御在ますから、如何な事を御話遊はしても些少も心配は御在ません。失禮で御在ますが、まだ買物のあるのを忘れて居りましたから、一寸其處まで参じてまゐります、御迷惑では御在ましやうけれど、何卒御嬢様の御保護を御願望申します、御嬢様、貴嬢も齒に嚙むではかり御在遊はさずと、思ふさま柳田さんをはじめ御遣り遊はせな」と言ひながら莞爾笑ふて、障子をひつしやり。

三四十分はかりして乳母のお松はいそくとして歸り來り（まあ斯様に締め切つて御置き遊はして御暑あ御在ませんか。私は急いで歩行いた所爲か、暑つてくまあ斯様に汗が出ますわ。おや、御嬢様如何か遊はしたの、泣いて居らつじやるじやございませんか。柳田様如何なすつたんです、え、また例の喧嘩で御在ますか、孩兒輩には困つちまいますね。それはさうと今帳場の時計を見ましたら、最十時に五六分きや御在ませんよ、また遅く

なりますと、此後回の爲になりませんから、今夜はこれで切上げやうじやございませんか。柳田様そんな御心配は入りませぬの、いゝえ、此家の女主人は私の友達ですもの、最う私から遣つて置きましたの、なんで氣の毒な事が御在ますものか、その代替には後時で澤山奢らせて上げますよ。相も變らぬ口入丁、別を惜むお文嬢を無理に引き立て、又の逢瀬を契りつゝ二人は左方、柳田は右方へと立ち分れぬ。

柳田は不忍池の畔を辿り、馬見所の前より龍岡町に出で、おのが旅寓へ歸りしは夙や十時半頃なりき。

例ならばまだ一時間位は机に向ひて、勉強に餘念なかるべき時なれど、今宵は種々な事に心を惱うて何となく胸噪がしきに、部屋に入るとその儘蒲團敷かせて横になりしが、先刻の事心にかゝりて睡られぬに、輾轉反側一時の鐘を聞き二時を聞きて、漸々に睡みかゝりし一睡の夢、結びもあへぬその中に耳邊に響く大喝一聲。驚いて飛び起きれば警部巡查六七名枕頭に

立並び居て、柳田政雄御用だ。

その四

寐耳に水泡のそれならで、御用の一聲に驚かされて、柳田政雄は寐衣の儘に起直り呆れ果てゝのみあるに、警部は政雄を睨めつけて、さあ嫌疑あつて拘引に向つたのです、御準備をなさい。いはれて漸く正氣にかへりし柳田政雄は震える手もて衣服を着かへつ、さて警部に打向ひ、私は拘引せらるべき理由がありません、嫌疑とは何の嫌疑です。何の嫌疑か、警察署へ行けば解ります、兎に角警察署まで御入來なさい。併し私は警察署などへ参るべき必要がありません。和郎に必要があらうがあるまいが此方の知つた事ではありません、兎に角私は拘引状を持つて來ましたから、繩をかけます。敵抗をしたところで下にも大勢警察官が居りますから、逆も逃れやうはありません、尋常に警察署へ御出なさい。政宜しい、何處へ

でもまいります。何も逃げ出さなければならんほどの悪事を致した記憶は
ありませんから、勿論敵抗も致さねは繩をかけられる必要もありません。
貴郎はよく必要々々といふが、繩を掛けるのは本官に於て必要ありと認
めます。問答は無益です、警察署へ御入來になつて御辯解なさい。

千言萬言争ふとも詮方なしと思諦らめたる柳田政雄は、十數名の警官に圍
まれて本郷警察署に拘引せられ、間もなく検事局へぞ送られぬ。

豫審判事は成規の如く族籍姓名年齢を糺ねし後、さて語静かに政雄に向ひ、
汝は大學の學生であるさうなが、さすれば本官のいふまでもなく十分に

教育のある人と思ふから、眞逆虚偽の申立をするやうな事はあるまいが、
何卒十分に明白の答辯をしてもらひたい。固より身に暗い處がありませ
んから、知つて居るだけは逐一申上げましやう。昨日は外出致したか。

政(はい、學校へ行きました)。何時に歸つたか。政(午後の六時過で御座い
ましたらう)。大變に遅い歸宅だな、何處ぞへ寄路をしたのか。昨日は

大手術があつたからそれで遅くなつたのです。それから何處かへ出掛け
たか。政(谷中初音町に来て居ります叔父の許へ参りました)。それは何時
頃であつた。政(叔父の許まで参りましたのは七時少刻過ぎましたやうでし
た)。さて何の必要に行つたのだ。政(用事があるから來て呉れと申して寄
越しましたから)。何時頃に其家を出たか。政(九時少刻前でした)。

判事は政雄の顔をじつと眺め、確然とそれに相違ないか。政(はい)。如何
して九時前といふ事が分つた。政(四五町歩行てから上野の鐘聲を聞きまし
たから)。叔父の許を出る時に叔父は如何して居つた。政(叔父は大變立腹

して居りました)。如何して立腹したのか。政(それは叔父と私との間の事
で申上るる必要はなからうと思ひます)。好しくそれは後刻で聞くとし

て、叔父の外に召使の者でも家内に居つたか。政(誰人も居りませんでした)。
それから其方は直に下宿へ歸つたか。政(はい)。それは何時頃であつた

か。政(十時半頃でしたらう)。これ政雄、考へて見よ、谷中初音町から本

郷森川町まで歸るに一時間以上もかゝる奴があるものか。何方へか寄道を致したか、或はまた叔父の家を出たのは最遅かつたのか。

さては半瓢亭の事について何事か取調あるならん、惣にいひ出で、我は勿論彼の風野令嬢の名譽に關する如き事ありては、臍を噬むとも及ぶべからずと思案をなして政雄は、何處へも寄道は致しません。何では叔父の家を出たのは最些少遅かつたのかな。政さうでも御座いません、確かに九時前に出かけました。何十時の鐘と間違はしないか。政鐘はかり信實に致したのでは御座いません、時計を見ましても確かに九時で御座いました。何では一時半からの時間を途中で費したのか。政はい、その通りです、散歩ながら歸つたのです。何處を通つて散歩したのだ。政根津の方へ下りて根津權現の邊を散歩しました。何全くその通か。政相違ありません。と答ひしは可成的密會の痕跡を湮滅さんとの注意なり。

檢事は頓がて一冊の筆記の帳面を取出し、何柳田、この帳面に見覚えがない

か。政あるところではない、私の所有物です。何昨夜十一時頃ある處に於て拾ひ取つたものがあつて届出でたのだが、其方取落した記憶はないか。

政成程さう伺ひますれば、昨夜歸宅の時間が早ければ友人の許へ寄るつもりで、その筆記簿を持つて出たに相違ありません。今まで氣がつかずに居りました、或は歸途に何處かで取遺したかも知れませんが、併し判然とは申上げかねます。何柳田、先刻は叔父の許から九時頃に出で、散歩をして歸宅したと申したな。それだけの閑暇があるなら何故その友人の許へ行かなかつた。うむ、それも後刻で聞くととして、この物品を拾ひ上げたのは、根津から本郷へ出る方ではない、不忍池の馬見所の前で拾ひ上げたといふ事だが、如何じや、眞逆根津近傍で落したものが獨自に馬見所近邊へ遣つて來る理由もあるまい、うむ。如何も一々曖昧な事を申すな。それも姑らく後刻としたところで、こりやこの手帳の鮮血は如何致したのだ、血に染みだ手痕が判然と残つて居るぞ。さあこれは如何致したのだ。何私に

も分りませんが、或は昨日手術の折に手に附た血を知らずに、この帳簿を
 握んだのかも知れませんが、兎に角自分には毫も譯がわかりません。一舛
 かく御取調になりますのは何等の御必要があつて御遣になりますのか、伺
 ひたいもので……。判事も左様に韜晦けるには及ばん、一層驚くべき證據
 物件を見せて遣らう。と判事が今しも取り出したるは、明晃々たる大形の
 手術刀、無惨や夏尙は寒き刃の上に淋漓と染めたる鮮血の紅、見るからに
 恐ろしとも氣味悪し。

判事は一層聲を勵け、判事柳田この刀に見覚えはないか。問はれて柳田は手に
 とりて熟々見やりぎよつとして、政（これは先々月叔父が欲しいといふので、
 送つて遣つたのです。と語り出れど、判事は信じたらん色もなく、判事柳田
 何程陳じても最早罪状は充分上つて居るから無益な事だ。昨夜午後八時四
 十分から十時までの間に、大恩ある叔父重藏を斬殺して四千餘圓を奪取つ
 たに相違あるまいな。

如何なる罪科にてかゝる法廷に引出され、かゝる取調を受くる事かと、五
 里霧中に迷ひたりし柳田政雄、漸くにして判事が語に雲暗れ霧收まれば、
 こと何事ぞ、自己が身は可憐や千仞の谷の下、恐ろしき奈落の底に呻吟き
 居る身となりたりしなり。あゝ罪もあらうに殺人犯の罪とは何事ぞ、人も
 あらうに叔父殺とは何事ぞ？

如何なる大罪の嫌疑なりとも、素より犯せし罪のあるにあらねば、曇りな
 き心の月影を掩ひける黒雲も何時かは暗れぬことやあるべき。それらは少
 しも憂ふるに足らねど氣にかゝるは判事が言、若やわが間違ひにはあらざ
 るかと思ひ直して、語急しく柳田は、判事閣下、叔父が如何か致したので
 御座いますか、何か怪我でもあつたので御座いますか。と打問へば、判事
 は聞も了らず、今初めて聞いたやうな顔をして、證據が十分に上つて居
 るから所詮免るゝ事は出来ん、潔よく叔父殺害の罪科に服して仕舞た方が
 よからふ。政え！それでは叔父は全く誰人にか殺されたので御座います

と思ひます、彼晩の兇行者は如何しても柳田に相違ありません。私の今迄探偵し得たところによりますと、柳田は平常は柔和い男であるが、非常な神経質であつて、些細い事にも怒り易いといふのです。既に大學へ入つた計の時に、友人と口論をした結果小刀を以て友人を傷けた事があるさうです。然るに彼晩には柳田は叔父の重藏と非常な争論をしたといふ事ですから、憤怒のため目眩んで殺意を生じたのかも知れません。第二に重藏の妾なるお竹が申立に據りますと、お竹は下町へ買物に出掛けなければならぬので、切りに重藏に出掛けたいといつたけれども、重藏も政雄も眞赤になつて争論つて居るので毫も耳に入れなかつた様ではあつたが、其中追々談話も静かになりさうであつたから、斷なしに下女を連れて出掛けたのは、八時半頃であつたといふのです。そして歸つて來たのは十時頃であつたが、その時は重藏は何者かの手に掛つて、鮮血に染んで死んで居たといふ事です。然るに政雄は叔父の許を九時前に出たといひながら、下宿

へ歸つたのは十一時少刻前だといふ事です。殊に最初の御調の時は根津の方を散歩した爲めに遅くなつたといひながら、手帳を御示になると急に上野の方から馬見所の前へ出たといふは、一々不審の申立です。殊に罪蹟を明白に致しますのは、その晩は彼家へは政雄の他に來たものはないといふことです。その上彼重藏が四千圓といふ大金を有つて居るといふのを知つて居るのは政雄の外にはあるまいと思ふ。政雄は一向左様な事は知らぬと言張りますが、お竹のいふ處によりますと重藏は語の序に、大金を有つて居るといふ事を政雄に聞かせたと申します。それに血に染みだした指の痕ある筆記簿、兇行に用ひた手術刀、一々彼の罪蹟を證據立て居ります。政雄は手術刀は叔父に送つたものだと思はすれど、叔父は筒様なものを有つて居つたからといつて何の用に立たぬだらうと思ひます、これは申上ぐるまでもなく醫師の外には用のない器械ですから。早川のいふところに據れば、柳田が殺人の嫌疑は如何にしても免れ得べき

術あらじと思はるれど、さて人種々の見る所あるにやあらん、吉田探偵は吸ひかけし煙草を下に措きながら、早川君の御意見は一通御道理では御座います、私は直ちに同意する事は出来ません。まづ第一に重蔵が負ふたる傷痕といふものは、如何しても左手利のものが斬りつけた傷に相違ありません、併しながら、柳田は平常左手利ではないのです。第二に若し柳田が争論の末に、俄に殺意が發したとすれば、重蔵は十分に柳田の舉動を見て居るからして、斬りかゝつて來れば相應に抵抗をする筈です。然るに重蔵の死骸には殆んど其いふ點を見出す事は出来ん。なる程多少品物が紛亂して居るとは居るものゝ、これは兇行者が後時から遣つたのに相違ない。若し兇行者が後時から品物を紛亂したものとすするならば、その兇行者といふのは餘程深く考へたものであると思ふ。それから彼手術刀であるが、申上げるまでもなく醫師が平常所有して居る物品ならば、非常に手入を善くしてあるからして、彼様に錆びるといふ譯はない、これは必らず政雄が所

有物でないといふ事は明白である。早川君は是等の事實に氣の附かん人ではないのに、たゞ一向に有罪を主張して居られるは實に分らないとである。精細に説き立つる吉田が言語、これもまた一々道理あるに流石の早川もこれには承服したらんと思ふにさる景色は毫もなく、早成程手術刀は錆て居た、錆ては居たが何も彼の手術刀が柳田が治療の爲めに始終隠袋へ入れて置いたのではあるまい。醫學生が普通の小刀の代用に手術刀を用ゐるのは決して珍らしいとではない。殊にあの手術刀は非常に大形であつて普通に使う物品ではないから、多分柳田が小刀の代用に始終隠袋へでも入れて置いたのを、憤怒に乗じて用ゐたのであらうと思はれるね。好しやまた彼物品は叔父の物品としたところで、他の刀で殺して仕舞つた後で、叔父に遣つたのがある事を想起して、自分の罪蹟を言免れる爲にそれを探出して、死骸の傍に棄て置いたのかも知れない。君は左手利の事をいつたが、僕も最初にはさう思つたのさ。併し漸々考へて見ると外科醫師といふものは、

皆左手の手がよく利くものだ、それにあの柳田は平常は左手利ではないが、刀を取らせると大變に左手が利くといふ事だ。既に兇行のあつた日に大學に大手術があつたさうだが、その時彼柳田が左手を自由に使つて教授達に譽められたといふ事だ。さうして見れば柳田はわざと左手を使つて自分の嫌疑を避けやうとしたのかも知れん、かういふとそんなら最初から殺意があつたので、憤怒の餘りに殺意を發したのではないかといふ疑問が起るかもしれないが、實にこれが考ふべき問題であるのだ。四千圓の金子を奪取る爲めに殺したのか、殺した後金子のあるを想起して盗んだのか、十分に推察する事が出来かねるが、或は四千圓の金子のあるといふ事を聞いた時に既に殺意になつて居たかも知れない。重藏の死骸の位置から考へて抵抗した痕跡が見えぬと言はれたが、これは君の鑑定が若い所爲だらう。身軀中に衝傷が四ヶ所あつて、刃のかすつた跡が六ヶ所ある、抵抗しないものにこんなにかすり傷のある理由はない。殊に衝傷は皆灸所の周圍にあ

るのを見ると、多少身軀の事を心得て居るものゝ所業に相違ない、醫學生に目を付けたのは決して誤謬ではあるまいと思ふが如何です。そんなら他から悪者が侵入してかゝる兇行に及んだのかといふに、他から侵入した形迹は毫も見えず、それかと言つてお竹お三が殺したかと言ふに、勿論彼等の所業でないとは昨日の取調で十分に解つて居る。なに四千圓の金子は如何したと、これは君にも似合ん事をいふではないか。勿論何處へか隠蔽たに相違ないさ、餘炎が褰めてから使用ふつもりで木の根か石の下へ埋めて置くといふのはよくある方法だからね。兎に角柳田が叔父が殺された事を毫も知らんといふなら、時間を曖昧にする必要はないではないか。これが判然せん中は何程君が柳田の方を持つとしても無益な事だ。

早川の言の了るも待たで吉田探偵は何事をか言はんとするを、判事は暫時と推留め、例「最些少伺ひたい事もあるのですが、何分出廷の時間に差迫りましたから、また退廷後に御意見を伺ふ事に致し度ものです。御兩所の御

話を伺へは伺う程、軽々しく判断する事が出来ませんから、此後共に十分探偵を願ひたいものです。とはや立ちかゝるに、早川吉田の兩探偵も後刻を期して立別れぬ。

その六

判事がために止められて十分に己が意見を吐露しかねたる吉田探偵は、わが家に歸る途すがらも、考ふれば考ふるほど不思議なるはこの事件なり。虚心平氣に考ふるにつけて柳田に罪ありとは如何にしても信じがたし。早川は先入の主となりてや、醫師たらんものは左手の利かぬはなければ、己が罪科をは隠さんがために、左の手を用ゐたるなりといへど、他を殺さんず非常の時にさる事をなし得んは、かゝる事には幾度も出遇て、度胸の坐りたらんものならでは出来得べき理由なし。殊には死骸の形状より見れば抵抗ひたりとも思はれぬに、彼早川がいひし如くかすり傷の多きは何故ぞ。

かく傷を受けながら鮮血のさまで滴らざるは何故ぞ。思ふに不意に衝きかけて二三太刀にて仆しながら、尙ほ他に塗りつけんためにかすり傷をはつけたるにはあらずや。若しわが鑑定の誤まらずはこの兇行者こそ柳田政雄に罪科を塗り付けて、自己が所業を隠蔽んとするものにて、其計畫の巧妙にして普通の人の心付かぬ邊まで注意の及べるは、かゝる事には事慣れたる曲者の仕業なるべし。さりながらさる曲者の金子を奪はん欲望のみにて重藏を殺したらんには、柳田を陥れん計畫をなさん要はなき筈なり。推するに一方には政雄を深く恨めるものゝ、叔父重藏を殺して金を奪うと共に柳田を陥れ己が怨恨を還さんとしたりしならむ。

柳田は學校にありては君子とも云はれし程の篤實なる人物と聞きつるに、他の恨を買はん理由はなかるべし。邪推かは知らぬど重藏が妾お竹といふは、一癖あるべき婦人なり、かゝる奴輩は固より柳田とは嗜好の合ふべき理由をければ、或は彼婦人が關係なしともいひがたからむ。

それにつけても奇怪なるは彼柳田が歸宅の時間の顯然ならぬとなり。柳田はみづから散歩に時を費したりといへど、その實は他に明しがたき秘密の事情のありて、推藏し居るなるべし。何とかしてこの秘密を知り得たらんには、彼を牢獄の苦痛より救ひ出さん端緒を見出さん難かるまじきに、さてもまゝならぬは浮世かなど、繰返し〜て我家に返れば机の上に一封の書狀あり、差出人の名はわざと記されて、宛名の文字も殊さらに書風をかへたらんやうなり。何奴からの書狀ならんと封推切つて讀下すに、文字は悉く新聞を切抜きたる活字をは張りつけたるなり。

吉田探偵よ、われは彼柳田政雄の身上をは極めて悉しく知るものなり、この度の叔父殺害は實に彼が所業に相違なし。然るに貴君は却つて柳田の無罪を證據立てんと勉め居らるゝよし、若し左様なる見込違をなし居られんには、この度の功名は貴君の敵なるある探偵の爲めに奪はれて、貴君は徒に不名譽を買ふに至らん。われは曾て貴君に御恩を蒙りたる

ものなる故、窃かに御報導致すなり、ゆめ〜御疑念なく柳田の罪狀を評發せられ、功名を奪はれざらんやう冀望に堪えず候。と記されて、封書には本郷區の消印あり。活字の貼付けありし紙は江戸川の半紙にて、封袋は鳥の子を用ゐたるは透して見られんとを恐れたるならん。名宛の文字は正楷もて記されれば却りて平素の筆蹟を隠蔽すに便よかりしならむ。

さてこそな善き物こそ手に入りけれ。何者の所業なるらんと打かへしく糊の色まで意を注れど、際立ちて是ぞと思ふ點もなし。たゞ割合に封皮の揉めて隅々の藍色に染みたるは、濃花金巾の裏附きたる着物着けし人の内懐に入れられたるならむ。多數の文字を書きたらんには、我が爲めに手蹟を觀破られんかとして、手數も厭はで活字を貼付けるほどに注意深き人なれば、かゝる大切の手紙を人手に渡す理由はなし、かならず自ら郵便函に投げ入れしならむ。本郷まで來る間にかく封皮の汚れんは、近くとも京橋邊



より来りしなるべし。とにかくこの手紙にて測り得たる事實は、縹緞下着やうの者を着ぬ人なれば、書生などの種族の人なるべきこと、本郷よりは近からぬ所に住む人ならむと思はるゝとなり。されどこれとても實に自己一箇の推測に過ぎず、その推測といふも雲を捉ふるやうなるものなるに、切角に得たりしと思ひし寶の價値なきにいたく望を失ひたり。されどこの手紙にていよゝ政雄を怨むものありて、一日も早く彼をば推形付けんと勉むるものあるとを洞察たり。想ふに吾を煽動して早川と競争する心を起さしめ、可成的早く柳田を罪に陥れん計畫なるべし、さても淺果敢なる企望かな。兎にも角にも政雄を恨む者のありとは知りながら、そを探出す途のなきこと

そ口惜しけれ。まづその端緒に有りつかんまでは彼お竹の舉動に目を付けんとこそ順當なめれ、よし〜今夜より一夜もかゝらず監守せんに、如何でかその端口に當り得ぬことのあるべきぞ！

その七

白晝の中は艶麗に晴れ渡りたる春の日脚の漸く西の空に傾きて、谷中の森影に峙を求むる群鴉の聲悲しく夕を告ぐる頃より、怪しく恐ろしき形状したる灰色の雲、東の空より群立ちいで、見る間に大空を呑み盡くし、一天墨を流して今にもほつりと一滴大地を濡らさば、天の窓を悉く開き放つて、天の泉の底溜かんまでも降来らんず有様、凄しといはん外には語も知らず。吉田探偵はこの空合にも恐るゝ色なく、暗闇こそかへりて幸福よしと、彼の重蔵が妾宅の周辺に近づき、物影を楯にとりて家内の様子を探らんと、杉の生垣を手探にして裏口の方に進み行けば、何者？ わが行く方に當り

て怪しき足音。南無三、見付けられては一大事と身を縮めて、さて闇黒を透して打見やれば、彷彿と見ゆる人の影、われより先に忍び来りしものゝあると見えたり。

何者ぞ、奇怪の漢と二足三足進みよらんと志たりしが、待てよかし！われ生じいに騒ぎ立たはそれと氣取りて逃去らんと必定なり、兎もあれ姿を隠して容子を伺はんと、老木の松の小影に潜みて氣息を殺し伺ひ居ぬ。

されど彼方も知れ者ならん、吉田が梵音を聞知りけむ、拔足差足音竊んで表手の方へ立ち出でつ、幾度か後部を見返り四圍を見廻し天王寺の墓地の方へ入り込みたり。

さては愈々奇しき奴なり、藪の中森の裡何處の際涯までも追纏らんとて心を決めて吉田探偵は闇黒の中にも、一際黒き姿を目的として跡をは跟くるに、彼方もそれと覺りて薄氣味悪く思はれけむ、吉田を捲かんとてか猫々道人が猫塚の近傍より、右の方へと折れ往きたり。彼方にその用心のあり

ては一向に追掛るのみにては効なからむ、捲かれたりと彼方に見せて、さてその後を爲さんやうありと、わざと左の方へ曲りしと見せて、とある墓碑の蔭に身を潜めて伺ひ居んとは知らざるか、黒き姿は徐々と元の道に現れて、一步は一步より早く上野の方へと急ぐやうなり。

さてこそと吉田探偵は身を起して立上りしが、この度は近くも寄らず、見失はぬだけを倚頼として後尾を跟くるは、さながら鼠を窺う猫にも似たらむ。

此度こそは甘くも出抜やりたれと思ひてか、黒き姿は足歩を緩めて美術學校の前より交番所の前を避けて、椋の林の中に入り、暫時行くまゝに何やら口の中にて囁きはじめしが、次第に語は聞取るゝはかり分明になり行き、(あゝ詰らなかつた、切角彼所まで行きながら何も掘出す事が出来ないといふのは)。といふ。

掘出す事が出来ぬ！ としても意味ありけなる語かな。掘出す、掘出す。あ

「讀めたり、彼奴奪取りし金子をば窃かにその邸の近傍に埋め置きしを、入知れず掘出さんとて來りしならむ。いよく正眞の犯罪人こそ手に入りたれど、吉田はいよく意を注ぐるとも知らざる黒き姿は、再たび語る獨言。併し可哀相なは柳田の奴だ、彼男がそんな事をする男かせぬ男かといふ事ならぬは判らぬといふ筈がないではないか、探偵なぞの中にも眼鼻の利く奴は少ないものと見えるな。」

「少ないか多いか、今に見よ引捕へてこれほどの探偵あるよしを知らして呉れんと、腕隆々と鳴りそむる吉田探偵を後背にきて、また起る黒き姿の聲音。(無名の手紙を検事や警官探偵なぞに放つて、奴等を十分に迷はして置いて到底柳田を死刑にきて仕舞うといふ趣向は如何だ、旨い〜大分面白くなりさうだぞ。や、誰人も近傍に居ないからよいやうなもの、萬一先刻のやうな奴に跟けても居られ様ものなら、飛んだ馬鹿を見るやうな事にならないとも言はれぬ、嗚呼物言へば昏寒した。ハックしよい風邪でも

感いては詰らない、どりや急いで歸ると仕やうか。

人は知らずと思ふとも天知る地知る我も知る、我が後背にありて總ての悪業を聞きたるを知らざるか、天に口なし人をして言はしむ、自己が口より大切の秘密を語り出でしむる天の配劑妙なるかな、直に引捉へんかとは思ひしかど、捉へんは容易すぎ事なれば、今少刻跟け行きてその人相の善悪、さては左手利かさあらぬかを探り見て、さてその後捉へんも遅きにあらずと、逸る心を押鎮め、思慮も智略も吉田探偵また隠見に跡尾を跟けぬ。

黒き姿は東照宮の黒門前より三宜亭の間を通り、彰義隊の碑の傍を過ぎて石階を下り、三橋の傍まで行きたりしが、何思ひけん立止まり、懷中に手をさし入れ何やらん搔探ると見る間に、やがてくるりと後部を向き、急足に半町ばかり駆け戻りて、青陽樓と呼はるゝ洋食店へこそ立入りけれ。取逃しては一大事と吉田探偵も續いて入れは、黒き姿は卓子によりかゝり

て、何やらん献立の注文をなし居たり。吉田も二品三品詠へ遣りて、さて見ぬ様に彼男の方を偷見るに、年頃二十六七の青年にて、眼鼻立も先は尋常の顔付なれど、何處やら他に好かれぬ風情あり。身に着けしは琉球紬の飛白の羽織、幾度か紺屋の手を経たらんと覺しき秩父銘仙の替縞の綿入、下着は瓦斯二子の綿入なり。

これだけにては吉田の心を満足せしめん程の材料はなけれど、此男の肌につけたる莫大小の襦衣久しく着りとも見えぬに、いたく藍に汚れたり、さてはかの二子の下着の裏に濃花色の附けるがため、その藍の襦衣につくをるべし。濃花色の裏巾！先刻の手紙と多少の關係なきにもあらず。

吉田の疑を惹きじはこれのみにはあらず、彼男肉を研るに左手に小刀を取りて、右手に三叉を握りたり。そ、すの壘を取るにも胡椒をかけるにも悉く左手ならぬはなきに、吉田が心裏は雀躍をさんばかりに嬉しく、いよいよ此奴こそ眞正の犯罪人に相違なし、この家の裡にて捉らへんには、家主

の迷惑にもなるべければ、早く戶外へ出でよかし、即座に繩をは打掛けくれんと、尙も眼を放さずで打見やれば彼曲者は勘定を拂はんとて、懐中より錢入を取り出で、幾枚かの白銅を數へて渡すに、この度もまた左の手をは用ゐたり。

左手利！左手利！疑ふべくもあらぬ左手利！先刻の獨言といひ、重蔵が殺害されし家の周圍を徘徊し事といひ、さて其上に此左手利。確然に顯明に重蔵を危めし大悪人に相違なし、一步にてもこの家の外へ出でよかし。彼男は勘定を済まして立出づるに、取逃しては今迄の辛苦も水の泡となりぬべしと、自己も急ぎ勘定をなして立ち出でたるは上野車阪町。捕物にかけては比類稀有なる吉田探偵、はらくつと彼男に近寄ると見る間もあらず、御用の一聲諸共に襟髪掴んで引倒せば、敵手は意外に脆くして、忽ち大地に仆されて難なく繩をかけられぬ。

翌朝昨夕の雨の残りなく晴れ渡りて、長閑に立ち昇る旭日影より尙早く、八百八街至らぬ隈なく行渡る新聞紙は、驚くべき一怪報を傳えて、數知られぬ都人士の心を轟かせぬ。

この頃いと評判よき毎朝新聞に小説の筆を採りて、傍らさる大家の編輯すと聞ゆる文學雜誌に關係ある無聲居士は、昨夜九時半頃上野青陽樓にて食事を了り、戸外に出づるを待ちてある探偵の爲めに捕へられたりと、一度新聞紙上に現はるゝや、珍らしき事としいへば、枕頭にて半鐘をすられたらんより騒ぎ立つるが世の人情、詐偽取財なさうだといふ者あれば、何左様ではない、其時は僕も現場に通るかゝつたが、段々聞けば國事犯とやらの嫌疑と、見て来たやうな臆談をつく講釋師もどきの人もあり。知れぬだけに自分勝手に種々な名をつけたりし罪蹟も、夕方に成りて漸う明白になり渡れば、是はまた何とした事、文學者ともいはるゝ者にあるまじき殺人の罪。過般より世間の口端にかゝりて罵しゝかりし叔父殺害は、其實この

無聲居士にてありしこの事なり。

文學者として固より普通の人間以上のものにあらねば、勿論萬知萬能の神にはあらず。塵まり生れて塵にかへるべき五尺の身軀に五塵六欲の惡血を滲へたる身の土、淺間しき心、賤しき思の折にふれては起らぬ事のなしとも限られぬと、其所には良心といふものゝありて、正道より外れざらんやうに支配するに於て、まづは世の人の師表とも仰がるゝなれど、その良心の羈絆を蹴破りて意馬心猿の走るに任せ、法律の鞭撻を受くるやうになりては、夙や人間の下流にして、畜生すらも風上には置きともなく思ふなるべし。先年何某山人とやらんが竊盜を働きて、懲役の刑に處せられし折にすら、世間の人々は一般の文學者の價値の下りたらんやうに、口を極めて罵りしが、それに輪をかけたる暴悪者の出來ては、いよく我等文學者の名折なりとさる大家の涙を揮うて語りしも實によしなきにあらず。世間の小説嫌の人々は時こそ來れど文學者全軀を一纏にしての裏叩き、恨まれた坊主

の肩に掛けられし袈裟は氣の毒なるものなり。されど無聲居士を親しく知れる人々は、容易くはこの事件を信ぜんとはせず、如何なる證據のありてかは知らねど、彼様なる篤實にて無慾なる好漢を殺人の嫌疑とは、さても其筋の鑑定の利かなさよと、打笑ひ居たりしが、果せるかな。中一日を越して其翌日、無聲居士の拘引は全く誤人のよしにて、無情の雲は何時までも曇りなき月影を掩ふとかたぐ、やがて青天白日の身の上とぞなりぬ。

かゝる曇翳なき身をもちながら、何故にかく不思議なる奇禍にかゝりしかといふに、讀者は既に知らるゝ如く、彼吉田探偵が闇黒の夕に目を着けたる姿こそ、この無聲居士にして、その無聲居士の舉動の一々に怪しくして吉田探偵が胸裏に描き置きける兇賊の理想に符合したりしが爲めなりしなり。

さらば無聲居士が何故に吉田探偵に怪しまるゝ所業をなせしかといふに、

こは實に一口譚にしてもあるべしと思ふはかり、いと馬鹿々々しき事の顛倒より、終に此處に至りしなり。

その事の當否は姑く措き、己が朝夕見聞したる事より材料を取らんとするは、大詩人ならぬ分際の文學者には少なからぬ事なれば、漸く文學者の芽生ともいふべき無聲居士などには固より免がれぬ事にて、叔父殺害の風評の耳に入ると等しく、無聲居士が胸中に浮み出でたる一篇の小説。この事實を基因にして書きたらんには、假令洛陽の紙の相場を狂はせん事は難くとも、一枝の筆に鬼泣き神哭し悲酸の文字の花を咲かしめん期望なきにしもあらずと思ひ出でば、筆を取る手の癢く覺ゆるを、逸りては大成すべしにあらざと、二日三日は趣向の考按に夢の間さへ費して、如何やら斯やら一部の小説になりかゝりたるに、さらば是よりは實地を視察していよいよ妙想を練らんものと、さてこそな墨を流したらん如き怪しき空合も心にかけて、かの初音町の妾宅の夜の景色を探りに行きたるに、探偵と覺し

男のわれを怪しく思ひてか、身を潜めてわが舉動を伺うやうなるに、さ
 めも面白き奴に出逢ひたり。われを怪者と思ふこそ幸福、自ら曲者と彼に
 思はせて兇賊が探偵に跟けらるゝ趣を知り得んものと、何に付けても實驗
 を此上なき重寶と思込みし三文文學者、休せば善きに探偵に見えよかしに
 逃げにかゝれば、いよく怪しと見て取りしか、彼の探偵は何處までも追
 ひ來るに、極は徐々小氣味悪くなりはじめ、兎にも角にも彼奴を捲くに
 如くばなしと、詰らぬ點に大骨折りて天王寺の墓地に隠れたるに、道の探
 偵もわが踪跡を見失ひてか、あらぬ方向へと行きたるに、馬鹿な奴ぞと心
 裏に笑ひて、上野の方へさしかゝる途々、頭胸は再度小説の趣向に奪はれ
 て、彼様でもあるまじ斯様でもならず、柳田を眞正の叔父殺害者としては
 興味が索然やうなれば、彼をば誣罪にやむ正義者となして、彼の他に兇
 賊を作り出してその罪科を悉く柳田に染り付け、無名の手紙を四方に放つ
 て關係の人々を迷はすとなしたらんには、一廉の面白き小説になりつべ

しなど、胸裏に起りし想像をその儘口端に上せたるを、神ならぬ身の數分
 前に捲いて遣りしと思ひたる彼探偵に偷聞され、加之、常には何事につけ
 便利なりし左手利が、思はぬ猜疑の原因となりて、さてこそかゝる不幸を
 速らに至りしなれ。
 殊に彼兇行のありし夕は、代地の川長に新聞記者の懇親會ありて、無聲居
 士も幹事役の一人なりしかば、午後六時頃より其處にありて十二時過る頃
 刻までは、此家の外部に出でたる事のなきよしは、其夜集會したりし人々
 の證明にて明白なるに、嫌疑は忽ち殘なく晴渡りて、名に因む無聲居士の
 胸裏には立噪ら波風の聲もなし。
 疑ふ心の眼には油坊主も鬼の姿に現はれ、枯尾花も幽靈かと疑はれし例は
 今更に珍らしくはあらねど、これはまた曾參を殺人の罪にて刎首にしたよ
 りも馬鹿な事情と、關係の人はさらなり、酷い運命に逢ふたる本人さへ餘
 りの事に腹も立ちかねて、苦笑に笑つては濟したれど、獨り笑つて濟まし

かねたるは吉田探偵が胸裏。天晴功名と思ひし見事外れて思ひも寄らぬ大耻辱大不名譽、職務に對しても腹かき切つて死にたきほどの胸裏の苦痛、流石事物に動ぜざりし吉田梅太郎も一念此事に至る度毎に、頭腦は嚇ど熱くなりて胸裏に焚ゆる修羅の炎には吐く氣息も光炎や發さむ。

その九

何事にも物見高きは江戸兒の平常、腹に蟠かまりなき鯉の吹流。昨日の殺人犯の事件は根もなく忘れたらんやうになりて、今日は何處に行くも探偵の失策譚はかりなるに、都下幾百萬の人々がみま悉くわが顔を見知れる譯はなけれど、道路に行逢ふ衆人のわが方を見て冷笑ふやうなるに、心はおのづから臆して、世間を廣く歩行んとは何となく嫌忌になり、如何にしてこの不名譽を回復さんかと、心は一向にその事のみ屈托して、平常は活潑々として陽春三月の花とも見えし吉田探偵も、今は夙や霜に惱める荒野

の草、打萎れてぞ見えにける。

胸裏の懊惱に家内のものに逢ふすらも懶しとて、一間の裡に閉籠りて茫然と沈考むその有様は、面壁九年の大師殿と魂競やなし居たらんと思はるゝばかり、煙草も吸はねは酒も吞まず、三度の飯も箸は取れど咽喉より下部へは通らぬ事あり。

沈思に沈思をなして、西洋諸國にありしと聞く探偵の例などを、想起しては應用めて考へ見れど、格別に善き計畫も出で來ぬに、われながら厭み果てゝや、そのまゝはたりと横まに倒れて、はつと吐く息の音いと凄し。折から下婢がこのやうな御手紙が参りましたと持來る一封の書面、懊惱やと思ひながら誰人よりの手紙にや、萬一も探偵の素材となるものにはあらぬかと、引奪くる様にして其手紙を受取り、襖を充分と締て出て行けどあらくしくいひ放ては、事情を知らぬ下婢は驚きて開きたる口を結びもあへぬに、早く出て行けと二の矢の御叱言、さても恐怖と逃けて行きぬ。

餓飢に疲れし隼鷹が偶々獲物を獲たりける時もかくあらんかと思はるゝばかり、右手に確乎と掴みたる手紙をば、突然に心付きたらんやうに周章して、皺を伸ばして打返しく、眺め入りてありたりしが、やがて何やら胸裏に浮めるとのありてか、微かに頬上に微笑を湛えしが、封推し切つて讀むに、つれ再び元の苦々しき面にかへりて、手紙に向けし兩眼は次第に血走り、身体の戦慄の其烈しき。

かくも吉田探偵を悩ますは、如何なる事を認めたる手紙ぞ？

名譽なる探偵閣下、貴君はわが忠告を用ゐんとせいで、犯罪の本人をさし置きて、他に罪人を求めんとせられしがため、終に受けずともよかるべき大耻辱を受られたるは、實に御氣の毒の至りに存するなり。さりながらこれといふも御身自身の身から出でたる鏽なれば、誰人をも恨みん所はなかるべし。それに引かへて貴君の匹敵となりて常に功名を争ひ居る或人は、昨夜までに柳田が犯罪人なる事實を、十分に説明し得べき程

の材料を蒐めて、豫審判事の手に渡し豫審判事も證據十分なりと認めて公判に附せん所存なりと聞けば、貴君が如何にこれより探偵に従事せられんとするも所謂祭典後日にして何の甲斐もなからん、貴君の爲めに計るに斷然此事件と關係を絶たるゝ方尤も然るべき事ならん。加之貴君の今回の失策には署長をはじめ關係の人々も餘程立腹の容子にて、貴君を免職せんとの相談も内々これ有るよしに漏れ聞く、古語にも先ずれば人を制しと之有れば、貴君も今茲に斷然たる決斷をなして辭職せられたらんこそ、迫めてもの事ならん。われは過日も申上げたる如く、曾て貴君の御世話になりたる者なる故、貴君の御身を思ふが爲めに、腹藏なく申し上ぐるなり。尙ほ貴君の御疑念なからん爲めに、兩三日中には或處にて不意に拜顔の榮を得るとあるべし。本名身分等は其折に御打明申すべく、今はたゞ當用のみ申し述候。

と認されたり。今度は餘に文字の數の多き爲か、手づから記したるにて、

かゝる事には餘程器用なるものゝ所業と覺しく、その筆法は過日の封袋の文字とは全く異なるやうに見ゆれども、眞實は同人の筆痕なり。紙も封筒も過日のと同じものを用ゐたれば、格別に怪しく思はるゝ箇處もなし、消印も過日と等しく本郷とありてハ便なり。

讀み了つて吉田が面は色を失ひて、凄味を帯びたる眼もて、屹とはかりに彼手紙を見詰しまし、暫時が程は、寂然、肅然、自然と身体の戰慄るゝ他には一寸ばかりも身を動さん様も見えず。

此以前に手紙を得し時には、良き材料を得たりけれど雀躍なさんばかりに嬉しく喜ばしく、讀み了るや否や書狀の怪しき廉々をは心の限り檢べたりしが、今この書狀を讀むと等しく、わが失策を稠人の前に嘲られたらん如くに感じられ、血沸き頭腦煮えかへりて、探偵の材料になさんために、精細なる檢査をなさんなどいふ勇氣は中々に起るべくもあらじ。かつては普通ならぬ大膽と、蟻螻の穴までもくゞり入らん程なる精細もて、

其名を探偵社會に博めたりし吉田探偵も、今はさる勇氣ある神々の宿り玉はぬにや、たゞわが失策を悔ゆるのみにて、可憐や自己みづから臆病の殻の裏に閉籠りて、蝸牛の角を出さん勇氣もなく默然としてのみありたりしが、須臾ありて如何なる事をや思起でけむ、手の折んほど膝上を叩いて、ふむ！と首肯く面上には、暗澹として面上を罩めたる憂愁の雲の裡に、彷彿たる一點の微光を認め得べし。

その十

見渡す際涯の大海原青疊を敷きたらんよりも平坦に、面吹く春風は島嶼の松が枝をも鳴らさぬばかり静穩に、波間に漂よふ白き鷗黒き舟をは打眺むる日和には、誰人として海を恐るゝ人はあらねど、若夫れ悪鬼羅刹の暴れに暴れたらん如き形状したる黒雲の、今までは煦々として長閑き光線を投げし大陽を一攫にして、天も地も常闇の國となり、雨暴れ風荒みて山の如き

大波瀾のわが乗る船を上げては下し、須彌山の上八萬奈落の底の間に玩弄にせらるゝ時は、大抵の者の心は消え亡せて魂は天外に飛び去りぬべし。浮世の海も同じ事にて何時も海路の日和と鼻歌唄ふて居らるゝものにあらず、何時かは逆捲く波瀾に悩まざるゝ事のなかるべき。その時になりて毫も騒ふところなく、神色自若として日和の時と變らぬ心を有つ人あらば、この人こそ眞實の勇氣ある人と稱ふべけれ。吉田探偵は豫想も寄らぬ失策に一時はいたく氣を腐らせしが、固き根堅き節に逢ふ毎に切味の良くなる名刀にも似たらん心は、屹然として再び元に復りて、勃々とする勇氣には兩腕の關節鳴渡りて、髀肉の太らんを歎ちやせんと思はれぬ。

吉田は今迄の踟躕したる舉動には似もやらで、活潑々と傍の硯箱を引寄せ、さらさら〜と認め畢りしを何ぞと見れば、病氣のために出勤のなりがたければ、暫時病を養ひたしとの願書なり。

心臆し氣の腐りたる當時にこそかゝる願書を認むる心にもなるべけれ、元

の吉田となりたる今、かゝる心弱き振舞せんは一通訝しき事のやうなれど、これにも相應の理屈なくては叶はぬ事なり。

吉田は下婢に彼書面を渡して郵便に出させ、さてこれにて用事も済みたりといふやうなる顔色して、どつかと坐り机に凭れしが、やがて彼無名の書状を手に取り上げてまた幾度か打返して眺めながら、唇を漏るゝ獨言。この間の手紙ではたゞ柳田を悪む奴の仕業かと思つて、普通の書生風のものに許り目を着けたものだから、到底詰らない誤謬をしてしまつたが、此手紙で見ると餘程善く警察署の中の事を知つてゐるものらしい。何者か知らず？ 巡査？ 探偵？ まさかさういふ奴等があんな馬鹿な事をする理由はない、豫審判事が證據十分と認むれば直に公判廷へ廻すといふのは多少法律の事を知つて居るものは、誰人でも承知して居る事だ。だから果して公判の方へ廻されたか如何だか、そんな事には頓着なくなつて自分一箇の想像を眞實らしく云つて寄越したのかも知れぬ、併しそれにして僕が病氣のつもりで

警視廳へ出ないといふとを知つて居るものだ。それに僕が免職になりさうだといふのは、同僚の藤澤も言つて寄越したから跡痕のないとでは勿論ない、それを知つて居るといふんなら、如何しても警視廳の裡のものか、左なくとも多少關係のあるものでなければならぬ。併見渡したところで左様な事をしさうな者は一人も見えぬ、はて何者の仕業であらう。若しこれが自己と同じ地位の人の仕業であるならば、決して僕に向つて斯る書いた物品を送るやうな馬鹿な事をする筈がない。書いたものが探偵の材料には少なからぬ用をするものであるといふとは、殆んど素人でさへ知つて居る事であるから、若し探偵などの仕業ならば最多少旨い方法を用ゐる理由だ。それにこの無名の手紙の差出人は、酷くこの自己を邪魔にして居るらしい、辭職をしろと勧めるのも自己に全くこの事件から手を断せやうとして居るのに相違ない。若し先方が探偵でないにせよ、多少でも斯様な事に經驗のあるものならば、この自己の關係を絶せやうと思つて、却つて他の猜疑

を招くやうな淺果敢な事で満足する理由はない、萬一したならば或は存外我々の同僚の裡に出入をして居るものゝ所業かも知れぬ。

兎にも角にも此手紙の書人はこの自己を恐るゝ理由のあると、多少は警視廳の中の事情を知り得る便宜のあるものだといふ事は疑ふべくもない事である、加之に如何したら旨く自己の罪蹟を隠蔽す事が出来るかと工夫をしたところを見ると、本人は我々の目前に居るに相違ない。

さりながら待て暫時、この手紙を送した人物が、直ちに殺人犯の兇行者であると決断て了うば、ちと早まり過ぎるかも知れない。この手紙の面に書いてある通、眞實に自己の身を思つて呉れる人の親切から出たのであつたら、如何であらう。

いや／＼否、決して親切から起つたものではない、若し親切からの好意で寄越してくれた手紙ならば、何も筆蹟を推隠したり活字の貼付などをするには及ばぬ。要するにこれは殺人犯の本人か、さらでも關係のものゝ舉動

に相違ない。此處に目を着けて探偵するのが第一に必要である。それに此手紙の容子から推測つて見るに、先方にも相應な用心がしてあるらしい。此方で迂濶な事をしやうもんなら、直ぐ嗅付けて活路を作るに相違ない、これからの方法は敵に内兜を見られぬやうにするのが、大先である。彼方では自己のこの事件と手を切るのを切りに望んで居る様子だから、あの病氣届を見たら必らず氣を安んじるに相違ない。豈やそれが自己の計略で其實密々と探偵をして居るのではあるまいかと、一時は彼方の邪推を受けるとがなひとは言はれぬが、今日から病氣の積で一切面會を謝つて誰人にも逢はねば、自分も外へは出ずに家内にはかり閉籠つて、毫もこの事件には關係のない様に見せて居たら、彼方も何程か氣を許して來るに相違ない。その虚に乗じて小手の利く探偵を使つて探つて見たら、或は思はぬ場所から思はぬ材料を得るかも知れぬ。

と極めてさて誰人を依頼んだものか、迂濶な者に依頼み込んでそれが却つ

て敵方でもあらうものなら、飛んだ失策をせぬともいはれぬ、矢張人知れず自分で探偵するより他に良策はない。さうだ自分で探偵するのが何より良策だ。

沈黙考に心を奪はれてか、木偶のやうに身動きもえなさでありける後背の唐紙、さつと開いてこの紳士が御入來になりましたと、下婢が差出す名刺には無聲、秋山豪と記されたり。

その十一

柳田政雄が池の端半瓢亭にて密會ひたりし風野令嬢お文といふは、さる省にありて樞要の椅子を占め、此頃の改革沙汰にもかたとも動搖ぬ大立者風野定友と呼はるゝ高等官の令嬢、稚兒髭に黒友禪の被布を召されて、只今は洋行中の兄上と同じ車に乗せられて、御茶の水の幼稚園に通はるゝ頃より、後世畏るべしとの譽は學校中の輿論にて、あはれ男子にてありたらん

にはと、婦人の身を惜まるとほどの才女にて、装ろはぬ山茶さへ出花の年頃になりては、如何なるこつくの石地藏にても魂を天外に飛ばして見呆れんばかりの美色なるに、父上の御寵愛は何に比べんやうもなく、錦の囊に盛りて桐の箱の裡に納め置かぬばかりの御秘藏。名木には蟲のつき易き道理なれば、さる事のなからん中に相應の者あらはと、出入の者などいそれとなく依頼み置き玉ふに、何がさて地位がよくて御本人は廣き東京にも多數はあるまじき美人、その上に學問藝道に秀で、婦人には惜かるべき才女とあるに、行きたき人貫ひたき家は綱の目から手の出るやうなれど、何れとして令嬢様の氣に入らぬも道理。お文嬢には他に見かへらん心を、たゞこの人にと打込んだる柳田政雄といふ本尊のありしなり。肉慾をのみ戀情と覺えたる人の耳にはいとまだるかるべけれど、眞實の戀情はさうしたものにあらず。假令比翼の枕を並べ鴛鴦の同衾せねはとて、われと彼の誠の心の通ひたらんには、これこそ眞實の戀情といふべけれ。

彼の柳田とお文嬢との交情もまた猥褻しき事とては毫もなく、家敷の掟の厳しきに、出雲の神と頼みてし乳母のお松の文使が、切めてもの心ゆかし、政雄が卒業のその時を松の緑の色變へで、操正しく待つべしと誓へし語を、つゆ知り玉はぬ父上は、二口三口の縁談を一度に持ち出しての無理勧め、さあ孰れか一箇撰り取れど、白痴が果物を分けるやうな相談に、伶俐に見えてもこのやうな事には経験のなき乙女心、聞くからに胸潰れて疾みには返事のなりかぬるに、父上は深き事情のありとも知らねは、娘心の耻かしさに即坐には返事の出来ぬも道理、よく考へて見るがよいと坐を立ち玉ふに、毒蛇の口を免れたらん心地して、ほつと溜息吐く背後から（令嬢様！）（乳人！）（困つたことになりまして御坐いますねえ）。二人は語を潜めて、如何したもの種々に心を碎いて相談しても、さてよき考案も出でざるに、結句柳田に相談してその後何とか思案を定めんものど、さてこそな乳母のお松が働いて、お松が以前の友達何某といふが女

主なる半瓢亭にて人知れず密會たりしなり。

逢はぬ間は彼様いふて斯様いふてと、胸間に口説の山はなしても、憎くか
らぬ人の顔を見ては、兼ねて思ひたりし十分の一も言出でかぬるものなる
に、況てや一時間にも満たぬ短かき逢瀬、何を語らひしか知らぬ間に過ぎ
て、大切の用事は十分に相談もなさで了ひしに、お文嬢は今更に別のいと
ゞ酷らけれど、何時までもかくてあり得べきにあらねば、家敷の首尾の悪
くならぬ中に歸らんと、心を鬼にしての別れ際、委しくは水莖の痕にと言
をのこして、ひかるゝ後髪を情なう拂う乳母のお松を、今宵のみは憎らし
うて立ち別れぬ。

わが産聲を上げてよりこのかた十七年のその間、母様は早く亡せ玉へしに
可愛さの一入増してや、普通ならずわれを愛しみ玉ふ父上の在し玉ふわが
家ながら、物思ひに胸の痛む今宵のみは、胡の國に行く王昭君の想して足
搔もいとゞ進まぬを乳母のお松に叱られては、漸くにして心を取直し、わ

が家にかへりしは十一時頃なりしに、さても時を移しけるよ、父上は夙
や休息み玉へしか、われも睡くはあらざれど、暫時睡るむ其間ばかりも嬉
しき夢を結はしやと寐床に入らんとする折しも、周章しう入來たる一人の
女中、(令嬢様主公様が御召でござります)。

その十二

今頃は熟睡の夢を結び居玉へけんと思ひし父上の、常にもあらず遅くまで
寐もやらで居玉ふのみか、今頃になりてわれを召させ玉ふとは、如何なる
用事のあるにやあらんと、傷ある脚の薄氣味わるく怖々に次の間まで來て
見れば、古銅の鼎火鉢をたゞ玉ふ煙管の音、例時よりは烈しきやうなり。
この音にまづ度胸を抜かれて、前へ出る足の自然鈍りかゝりて、思はず其
處に立止まれば、怒氣を含みたらん父上の聲にて、(文は如何した、文は何
をして居るのじや)。

寐耳に大砲の音聞たらんより恐ろしく胸に響きて、お文嬢の身体はふるくど戦ひ上りしが、時後れなは後れたるだけ怒氣を増さんと、刎首臺に上りたらん心地してその間へ這入れは、父上が（こゝへ来いとの一聲）、百雷の頭上に落ちたらんやうに思はれて、満身の血汐は一時に頭上にのほりやしけむ。

恐怖々々と坐を占めたる文子嬢を尻眼にかけて、父の定友は満腔の怒氣を無理に推付たらん柔和なる聲音もて、（文、今夜は何處へまゐつた。なにそんなに恐怖々々するには及ばんよ、たゞ何處へ行つてまゐつたかといふのだ。何？買物に行つた。それは知つて居る。がそれから何處へまゐつた、何處へも行かぬとがあるものか。これ、この親は淫猥な事をせよといつて學校へは遣りばせんど、親にも知らせず情人を拵らばせやうと思つて學問は注入んど。他は知らないと思ふか知らんが。報らせて呉れたものがあつて疾うに承知して居る。さあ情人は何者だ、さあこれ言はんか、よくもく

この父の面へ泥土を塗り居つたな、左様な非行があらうとは思はなかつたから、他が阿諛にも褒めて呉れよはよい氣になつて自慢をして居たのが今更耻かしい。併今になつて其様を繰言を云つた所で詮方がない、さあ如今からぶつとりと其男を思ひ絶れ。西洋風の教育を生嚙したものには頑固のやうに聞えるかは知らんが、親父たるものゝ目襍を忍んで不義を働くやうな奴は、娘ではない、往昔ならば手打にも致すべき奴ぢや、勘當でも致すべきぢやが、今時左様な事を申したところで、法律上成了る事でもないから詮方がないが、その報酬には先方の男が如何な奴にせよ、一緒にするとはならん。否でも應でも過日話した北小路子爵の次男を貰はなければならん、過日は工學博士の金山なり執なりと申したが、其方に左様な道ならぬ心があつては、一日も早く極めて了はねばならぬ、金山はまだなづくして居るやうだから、明日になつたら北小路の方へ承知の旨をいつて遣るからさう思へ。自己が斯う言つたら無慈悲な親だ壓制な父だと恨むかも知れん

が、和女の様を精神の腐つた奴には、壓制でなければ否けん。
 (それのみではない和女の様を奴には何程學問をさした處で、何の効用にも
 立たんから、明日からは斷然學校を止めにするがよい、何處へも稽古に行
 くとはならんぞ。それに不都合なはお松じや、この様な事がないやうにと
 終始傍へ附けて置くのにかへつて手引を致すなどとは、實に不都合な奴じ
 や、彼は明日から暇を呉れる)。

(こりや泣いて計り居つては解らん、種々聞き度い事もあるのじやから……
 これ返辭をせんか、こりや何故何とも申さん。まあ善いわ、また後日で緩
 りいひ聞かさう、さあ部屋へ這入つて寐え。こりやおりつ (女中の名) 自
 己も寐るぞ、床はよいか)。

席を蹴立て、寐所に入り玉ひし父上の後影をは、愁然に見送り居たりし文
 子嬢は、身の過失に呵責まれ、今は心も轉倒してわつとはかりに伏轉び、
 涙に袖を濡はし居ぬ。

その十三

宵の間は氣もなかりし春雨の一時過ぐる頃より、屋根の瓦にはつりくと
 濡めやかなる音をさせて、翠帳紅圍の夢自づから温かに快よかるべき夜半
 なるに、物思に沈む身のお文嬢は、宵の間の父上が恐ろしき言の耳を離れ
 て、今も尙ほ身の不始末を責めらるゝ心地するに、寐床の上に起直りて考
 ふれば考ふる程果敢なきは此身の上、道ならぬ事とは知りながら宿世の因
 縁か怪しくも忘がたなき君様が御姿、多少にても教育を受けしこの身に、
 かゝる果敢なき痴情のために迷はんはいと耻かしきとは思ひながら、尙
 も妄執の雲の晴れやらで、穢れたる所行のなからんにはと、思ひしころ
 が一生の過失。よもやと思ひし父上の耳にまで聞えし上は、常々いひ出し
 てからは何といふても後へは退き玉はぬ父上の事なれば、思ふまゝになし
 玉はでは聞き玉ふまじ、さりとて父上の仰に従はゞ一旦心を許したる殿御

を棄てゝの凄重ね、假令契を籠めねはとて婦人の節操は同じ事、他男を本
 夫に迎えて不貞な婦人と笑はれんは口惜しく。こんな時に乳母にても居た
 ならば、何とか相談の相手にもなつて呉れやうものを、父上の御憤怒の烈
 しさに、出入の者の家に預けられたと聞けばそれも叶はず、如何したもの
 と。小さき胸間に波風荒く立噪きて、思案に悩むその風情見る目も濡るゝ
 はかりなり。

失望は大決断を産むと少なからねど、その決断のよきは稀有なり。お文嬢
 は反覆幾番沈思に悩みて居たりしが、須臾ありて心を回復せしか、はふり
 落ちる涙を拂らひ、机の上なる硯箱をは取り出し、墨すり流して筆を染め、
 書かんとしては涙に暮れ、幾度となく巻紙を濡せしが、心弱くて叶はじと
 其身の運命の薄墨に書流したる書置の文、親の許さぬ痴情に父上の御心を
 痛めし上に、永年受たる海山の御高恩をは報じもせで、先だつ不孝は身を
 八裂にせらるゝよりも苦しけれど、生存らへて他夫に見えんはそれにも勝

る心裏の苦惱なれば、所詮それも叶ふべからず、とてもかくてもかゝる事
 の現はれては再度他人に逢はさん顔のなければ、障碍の入らぬ其中に家敷
 を抜けて……と寐衣のまゝに袂端折。拔足差足裏口より忍出でしは、正に
 是れ東叡山の二時の鐘、降る春雨に聲も濡れて、更け行く夜半に森々たり。
 例ならば女中等と共に起き出で、父上が召替の世話、朝餐の事などを
 指揮すべきお文嬢が如何になしけむ、今朝のみは父定友が役所に出づべき
 頃となりても起き来らぬに、流石に昨宵の事の耻かしくて他に面を見せど
 もなきのかは知らねども、何時までもさうして居らるゝものにもあらねば、
 呼起して来よとの命令に畏まつて上使に立ちし小間使が、周章しけに駈來
 ての復命。御寝間は昨宵のまゝにて毫も異りしところばなければ、大切の
 御嬢様は藻抜の殻のみを残して、姿は見えさせ玉はじとの語に、さてこそ
 一大事と常にば事物に動ぜぬ風野定友も最愛の娘を失ひし失望に、今はは
 や物狂はしきはかりになりて、娘が寝間に入り見れば先づ目に入るは、机

の上なる一封の手紙、表面には書置のたと記されたり。
立派な胸を愈これに轟かして、家敷の隈々、遠からぬ程は手を竭して探し
索むれど、もとよりこのはどりにあらんよしもなし。さては小さき心に深
く懸ちて、この書置に記せる如く果敢なくも身を淵川に投げたりしか、斯
ど知らはあゝ厳しく叱るではなかりしものと、今更に臍を噛めども及ぶ
べくもあらず。

この事を漏れ聞きし乳母のお松が驚愕は、をさく定友に劣るべしとも見
えず、天にも地にも換えがたなき令嬢様をその様なる身となしたにも、原
因はといへばこの乳母があらぬ戀情の手引したりしよりの事。令嬢様御一
人を殺して如何でこの身が安穩にて居らるべき、跡より身を棄て、冥土の
御随伴致すべしと、これこそ眞實に氣の狂ひたらん様子にて、濟まぬく
とはかり續けさまに叫び居りしが、翌る夜になりてこれも何處へかその身
を躲したり。

その十四

わが爲めに不慮の奇禍に懸りたる無聲居士が、其怨恨を報さんためにとて
來りしならむ、不在なりとて空しく歸しやらむはやすけれど、斯くては如
何にも臆したるやうに思はれんも残念なればと、吉田は無聲居士を客間に
招いてさて過般のわが罪をは言の限り打詫るを、無聲居士はかへりて押し
め、人間誰かは過失なからん猿猴も木より落ちる事あり、人違をせられし
とてさまでに憂ふるにも當るまじ。われは御身がかの柳田を叔父殺害人の
本人ならずと睨まれたる其眼力の銳利に敬服して、面白き材料をば差上げ
んとて來りしなりと、豫想の外なる無聲居士が語に、吉田は思はず膝を前
め、(と、如何な事で御座いますか)。

無聲居士が語り出づる言を聞くに、無聲居士は身にかゝる嫌疑の雲全く晴
れて青天白日の身上となりける其夕、友人何某が許を訪ひたるに、友人

は事なく此身の免されたるをいたく喜び、祝意のために一杯さし上げんと、それより兩人は献酬幾遍盃を回らす中、われは高らかにわが身が嫌疑を受くるに至りし顛末を物語り、さて柳田の身上に及びて、彼は決して殺人なれどをなすべき者ならぬと、其夜歸宅の時間に不審ある爲に、檢事の嫌疑の晴るよしなきはいと氣の毒なる事なりと話し合ふ其折しも、年頃四十三四と思はるゝ一人の婦人、慌だしく二階より駆け下り來て挨拶も碌々なさて突然に、柳田さんに何か變つた事でも御座りますかとわれに問ふに、われは餘りの不遠慮に呆れはてゝ、返答もなさて面のみ打守り居たりしに、主人は氣の毒氣にわれを見返り、これは本郷のさる官吏の許に奉公せしものなれど、故ありて心配の餘りに心の駒の狂ひてや家を飛出し、身を投げんとする處をわれ折よくも通懸りて無理に止め、わが家へ連れかへりて種々に介抱したるに漸く正氣に復りたるなりとの言語に、われも漸く心落居て、よくよく見れば這はわが昵懇なる風野定友氏が召仕なるに訝かしとは

思ひながら、柳田が嫌疑の次第を落點もなく語り聞かすれば、婦人は聞く事毎に打驚ろき、それは大變な大誤謬、包まずこの身上をまうし上られは、妾は仰の通り風野さまの召仕、不圖した事が御縁となりて今御話の柳田様を自家の御嬢様が思詰めて御戀慕遊はすに、濟まぬ事とはぞんじながら橋を渡した媒妁役、手紙の送遣のみに互に想を通はして御出でなされたるを、餘儀なきとの起りたるに逢はで叶はぬ事のあればと、池の端の半瓢亭にて密會したのが、即ち只今仰の晩、九時から十時までは柳田様も確然に半瓢亭に居られました、何の殺人の何のといふ事が御坐りましやう、それは其筋の御誤謬で御坐りますと意外の語に驚きて、またその心の狂ひるにはあらざるかと、種々に問ひ試みればこゝろむるほど、ますます事實の明白なるにぞ、御身の先見の明かなるに感じ入り、さてこそ報知にまありしなれ。道にかけて明るき無聲居士、小説にても書くつもりにて手眞似物摸擬、形容澤山に語り出る彼が言語を、最初のはどは何事をいひ出すらんと、半は

心安からで聞き居たりし吉田探偵は、留度なく前々膝をは續玉に打叩きて、彼柳田が時間の申立の怪しかりしは左様した秘密のある爲なりしか、われも一時は其所に氣の付かぬにもあらざりしが、如何に情人を庇保はんと思へばとて、その身の危殆も打棄て曖昧なる申立をする筈はあるまじと思ひしに、さては矢張その身を棄てしも情人の名譽を穢さじとしたりしならむ。これにて柳田が無罪の證明は十分なれど、さるにても當の犯罪人は果して何者なるか。一方の證據に上りなは如何でか當の犯罪人の知れぬ事やある、この報知一箇得たるは、孤軍重圍の折柄に百萬の軍勢の應援を得たらんよりも嬉しき心地とする、よし〜この一週の中にはかならずその罪人を探出して見すべし。

その時無聲居士は吉田探偵の側ににじりより、一段聲を低くして、その方はさういふ事として置いて、今度は一箇此方から御歎願せうしたい事がある、といふのは今申上げた令嬢ですが、その密會の事が親父殿の耳に入つ

て、高等官をも務むるもの娘にあるまじき所業と大變な立腹、その晩歸つて来る早々に大層叱られたので、飛んだ事をしたと後悔の念に責められて、その夜中に書置を残して身を棄てに出た様子なれど、それから此方最う五六日になれど、いくら手を盡くしても死骸の見付からぬ所を見ると、若しや死なうといふところを誰人かに救はれて、其所に隠れて居るのではあるまいか、憎い奴ではあるが、難儀でもして居るやうでは眞實に可愛さうであるから、何卒して捜して連れ戻りたいものであると、昨日その風野といふ令嬢の親父殿の話さ。なる程順序を御話しなかつたから御説明にはならなかつたらうが、一躰その風野といふのは私が大懇意の宅なのさ。で、一昨日の晩その乳母の話で驚いて早速行つて見ると其話さ。それでは先達て馬鹿な話から懇意になつた吉田といふ探偵があるから、それに依頼んで見ましやうと受合つて遣つて來たのです、風野ではまだ可成的秘密にして居るのですから、公然に探索を警察の方へ依頼む譯にも行かないで困つて

居るのです、是非何卒御承諾を願ひたい。

吉切角の御依頼、また過般のやうな失策をやるか如何かは知れませんが、遣つて見てもよろしいが、既に柳田の事件は私の名譽にかけて従事する所存であるから、逆も十分には手廻かねやうと思はるゝ恐れがあるのです。失禮ですが君は御手傳下さる譯にはまゐりませんか。無私に出来る事なら随分遣つて見てもよいが如何な事をするのです。吉御承諾下さればまづそれでよろしい、委細はまた追々御話致す事と致して、差當つて一件風野さんに伺つて戴きたい事がある。今御話の御令嬢が密會をされたといふのを、一時間も経たぬ中に風野さんの御耳に入つたその手續を伺ひたいのです、如何して御聞込になつたか、それが伺ひたいです。それに最一件承たまはりたいは若し或人がその事を風野さんにしませたのなら、その人の身分性は如何で、目下如何して居るかといふとも聞いて戴きたいものです。無事の位の事は極容易事ですが、如何です先生が自分で御入來になつて十分に

御聞込になつては、まそれは難有いが、ちど此方の都合もありますから君から御聞き下された方がよからふと思ひます。それに御注意を願ひたいは、私がこの事件に關係があると云ふ事を、可成的他に知らせないやうに願ひたいものです、いや最う御歸館ですか、何も御饗應申さんで、では郵便なり御使价なりで御返事を願ひたい。それから最一件と耳に口つけ何やらむづき合へて立ち別れぬ。

人間萬事塞翁の馬背分くる驟雨、晴れるも降るも思ひがけなき時に思がけぬことのあるは人間の身上、わがために苦しめられし無聲居士が測豫なくも、わが利益となるべき材料をさへ與えくれたるに、吉田探偵が欣喜は胸に溢るゝ計にて、回復せし精神は一層の勇氣を得て、一三時間前の吉田探偵とは全く異なる人となりけり。

暫時経ちて無聲居士より使价もて送り來れる返事を見るに、風野の家敷に近頃雇ひ入れたる車夫の吉藏といへるが、一人の女中に打向ひ、今夜御令

嬢は情夫と密會に出かけらるゝさうなといふを、女中は抑止めて、滅多な事はいばぬものそんな事が萬一して主公様の耳へでも入らうものなら大變な事が初まりましたやうと窘むるを冷笑つて吉藏は、誰人が怒らうと笑はうと此方の知つた事ぢやない、先刻乳母さんがその御使价に行くところを、確かに見たのだから詮方がない、小袋と小娘とはよく言つたものと、二人の話を定友が小耳に挟みしが、抑も事件のはじまりにて、その吉藏はその後二三日過ぎて、國許より急に用事のありて歸國せよと言寄越したればとて暇をもらひて、歸國したりとの事なりと語るが如く、いと詳細に記されたり。

尙ほこの他に吉田に非常なる感動を與へしはかの吉藏が左手利なりし事なり、吉田が念頭を束の間も離れぬ左手利なりしとなり。

讀み了りて吉田探偵は、何事か心裏に浮む事のあるにやあらん、また幾度か打點頭き、暮るゝを待ちて身準備なし、いそぐとしてわが家をこそは

立出でぬれ。

その十五

獨逸とんびに身を裹み頭巾に深く面部を包みし吉田探偵がさして行手は谷中の里、鳴く鶯の初音町柳田重藏が妾宅にて、今までは微かに茜色に靉翳きたる西の空の雲も全く見えなくなり行きて、暮合の鐘の聲淋しき空に響渡る頃なりしが、近づくまゝに彼家の容子を伺ふに、窓より洩るゝ灯影も見えぬは、たゞ静まりかへりて人間の住みたらん氣色も見えぬに、如何なる故ぞといよく近づきて、彼の入口の傍まで近より見るに、こはそも如何に、主人は何處へか移り行きて、たゞその跡に主人顔なるは横に張られたる造作付貸家の五文字のみなり。

吉田探偵は宛然掌裡の寶物を奪られたらん面地して、數分が程は茫然として札を見詰て立去るところも亡せたるやうなりしが、一人二人通り絶る人

々のけんなる顔して見かへりがちに立去るにぞ、われながら愚痴なる事
 してけり、こゝに何時まで居たりとて彼婦人の出て来るでもなければど、
 かのかし家札に記しある差配人の許にたづね行きて、われはお竹が親類の
 ものなるが、この度は不慮の事より飛んだ御迷惑を御懸申したり。さて只
 今初音町へと訪ねまありしに、最早明家になりし様子、彼お竹何處へか越
 しましたかと、たづぬれば、年配五十前後のさも律義さうなる老爺、さて
 も氣の毒や、お竹さんは御國許から出て来られた親類方と跡の始末を付け
 られて、一昨日親許の方へ退取られました、といふに其親許はど推かへし
 て尋ぬれば、どれ御待なされと、帳簿を出して、元根岸町三十番地曲木吉
 助といふものといと懇篤に教え呉れぬ。
 此方も懇懇に會釋して其處を立ち出で、さて情々と考ふるに、先日彼お竹
 をは檢事の手にて取調べし折には、これぞとて怪むべき箇處もなかりし上
 に、犯罪の本人は殆んど彼柳田に定まりし時なりしかば、事なく放免され

たりしが、われのみは何となく疑はしく思はれて竊かに探偵なし居る中、
 かの無聲居士を誤認めて捕縛なし、引續いてその失策のために氣を腐らし
 て、引籠りてのみありし中、彼奴を逃せしこそ口惜けれ。想ふに彼婦人公
 然ば元根岸とやらんへ越したりといへど、其實何處へ姿を躲せしか知れた
 事にあらず、萬一尙彼所に在らんには後めたき所業のあるにはあるまじけ
 れど、若し彼所にあらざるには彼婦人の身上に何事かなくては叶はじと、
 種々に思案を凝らせしが、兎にも角にも彼所までたづね行きて居るや居ら
 ずやつきとめて見んものと、根岸をさして急ぎ初めぬ。
 十三夜の月はまづ東の空を明るう輝らして、漸くに地平線上に軋り昇り、
 朧に匂ふその風情得もいはれぬ景色なれど、此所天王寺の墓地を抜けて御
 院殿の坂道にさしかゝるその間は、天にも達かんばかりなる老杉、幹を交
 へ枝を錯して白日さへ小暗さほどなれば、月の光はわづかに數丈の枝に宿
 るのみ。路側の新墓に一縷の香烟眞白に立上りて、白張の挑灯の風にゆら

めくも亡き人魂にやと思はれて心淋しき處なれど、鬼神をも恐れぬ吉田探偵には九々みな探偵の道の材料とのみ見えて、毫も恐るゝ色もなく根岸をさして急ぐ程に、はや墓地の半途邊までも來りつらんと思ふ頃、四五十歩彼方に當りて、魂消しき婦人の一聲きやつとはかりに耳を劈くに、大抵の者ならんには八萬四千の毛穴にことごとく粟を吹きて、人心地もなかるべきに、些少も動ぜぬ吉田探偵。さうなくは走りも行かで心を静めつ、その後の容子を伺うに、寂まりかへつて音もなし。さてはわが空耳にてありたりしか、さるにても確然に婦人の聲とまで確かめたりしに、よもや空耳にはあるまじし、とまれ角まれ其場に行きて容子を檢はやと、幾箇かの墓石を繞りめぐりて、聲せし方と思はるゝ近邊に行き見れど怪しき者もなし、さてはいよいよわが空耳の業なりしかと、立ち去らんと二三歩踏み出す足許に何やら障るものあるに、思はず地下を眺れば、南無三、木間を渡るゝ月影に鮮明に見ゆる女の死骸！



かゝる恐しき物を見ては、随分心太き人にて、まづは人氣ある方へ逃げ出して巡査にても呼び迎へんとすものなれど、事に慣れたる吉田探偵が最初胸間に浮みしは、曲者！といふ事なり。此女が最後の聲を揚げし後、毫も物音の聞えぬは彼曲者の遠くは逃げぬが爲めなるべし、かならずこの近邊に身を隠し居るに相違なしと、塔の蔭墓の周圍近き程は隈なく探し見たれども、暗さは暗し一人の事として十分なる詮索のなりがたきに、交番の巡査の援助を借らばやと、路ある方へ走り行き御院殿の方へと急がんとする折もよし、角燈に暗黒を照らして一人の巡査、此方を差して來懸るにぞ、駈け寄りて有りしとどもを告げ知らせ、共々彼の死骸の傍に來りて、再度その邊の搜索をはじめたれど、怪しきものゝ影だに見えぬに、今は何程捜すとも詮方なしと、死骸

の側に立寄りて角燈の光に照らさせて、婦人の面を一目見るより、吉田探偵は仆れんとするまでに驚き、黙然として立ち居たり。

事物に動ぜぬ吉田探偵が普通ならぬ驚愕に、何故ともえ知らぬ巡査は不審氣に。(吉田探偵、非常に驚愕なされたやうじやが、この婦人は御知友の婦人ですか)。吉田君は御存知はあるまいが、これは谷中の叔父殺害事件に關係のあるものです、彼被害者の妻竹といふものです。

吉田は巡査の手に持ち居たる角燈をわが手に借りて、死骸を詳細に檢べ見るに、傷痕は二ヶ所にありて、一ヶ所は背より肋にかけ、一ヶ所は胸元を貫ぬかれたり。兇行者が用ゐたる出刃庖丁は死骸の側に落散り居たり。

此外に證據となるべきものやあると、周圍を索ぬるに一間はかり離れて隠田草のかます煙草入の落ちてあり、尙一箇疑がはしきは死骸より三尺はかりの處に、五六寸ばかりの深さなる、新らしく掘りたりと覺しき穴のあるとなり。

吉田はまづ煙草入を檢め見るに鐵張の煙管、少量の煙草の他に壹通の手紙あり、披き見るに極めて拙なき女文字もて

だんながこんはんくるはづです○もたんどもつてくるのですからこんやがよからうとおもひますとにかく八じ半ごろまでいつものとこへ来て下さい

たけが

かざのおやしきにて

吉ぞうさま

と記されたり。吉田は莞爾と打笑み巡査の方を見かへりて、(兇行者が分りました。この兇行者が分つたばかりではない、谷中の人殺の兇行者も分りました。巡(それはまた如何いふ理由ですか)。吉(それはです、この死骸で見ると最初の衝傷はたしかに背中です。思ふに兇行者が穴を掘つて居たか何かして居るのを被害者が腰を曲けて切りと見て居るところを後部から衝か

けられたのです。私が聞いた苦聲はこの時上げたのでしやう、婦人があつ
 と言つてそりかへる處をまた一衝胸部から刺したと見へますが、もうその
 時は婦人には聲を上げる力もなくなつたものと見えます。これだけでは何
 にもなりません、この出刃の柄を御覽なさい、この血に染んだ指痕で見
 ると確かに左手利の仕業です、普通前のものならば四本の指痕は柄の右傍
 にある筈ですが、これは左側です。谷中の殺人者も左手利、これも左手利
 多少この二箇の殺人犯の間に何か縁故がありさうです。それにこのお竹は
 被害者の妾であつて、かゝる手紙を吉藏といふものゝ處へ送つたとすれば、
 二人の間柄に疑を容れるに足る餘地があるではありませんか。殊に彼吉藏
 といふ奴の平素左手利であつたといふとは證據が上つて居るのです、この
 手紙には惜しいといふには日付がありませんから、何日の事とも分りませんが、
 文句の上から推察して見れば例の兇行のあつた當日の手紙です。さてこの
 吉藏といふものは如何な奴かといふに、過日家で風野家の車夫をして居た

奴で、四五日以前に急に用事があつて歸國したいからと言つて、暇を取つ
 たのです。それに今日まで如斯して居たところを見るといよく怪しい廉
 が起つて来るやうです。まづ私の推察だけをいつて見ればこのお竹と吉藏
 とは怪しい交情で、柳田重藏を殺害したのもこの二人の仕業です、いよ
 く殺して金子も奪つて仕舞うと、何か二人の中に不和が起つたので、吉
 藏は婦人の狭い心からお竹が事實を漏らせばせぬかと思つて、埋めて置い
 た金子を掘出すとか何とか名をつけて、お竹をこゝまで誘き出して殺した
 ものと思はれます。

ありし事實を目のあたりに目撃したりとて、かくまで詳しうは知り得まじ
 と思ふばかり、淀みもなく語り出づる吉田探偵は、天眼通を得たりしか、
 人に知られぬ魔術にても知れるにやと、呆れはてたらん面地してかの巡查
 何某は、吉田が面をのみ見詰めてあるに、吉田は心裏の可笑しさを推隠し
 て巡查に對ひ、(死骸の方は一切御願申します、實は私は病氣届を出して居

る中ですから、公然探偵に従事する理由には行きませんが、警察署への報告等もよろしく貴君から願います。尤も十分に踪跡がついて捕縛すべき場合がありましたら、職務柄ですから見逃しては置きませんが、病中でもあるからして公然私の意見を御発表になりましては困り入ります、それも一寸御断まうして置きます、私はこれからちと用事も御坐いますから失禮致しますと、衣服の塵埃を打拂ふて、吉田は其處を立出でしが、元根岸へも行かねば、わが家へも歸らず、かの無聲居士が寓所をさして急ぎたり。

その十六

無聲先生御在宅かと門口より音のふ聲の了らぬに、奥の間より飛んで出で來し秋山無聲、御在宅かどころではない、吉田先生大變なものの手に入つたので、先刻から幾度先生の許へ行つたか知れやあしない。何それはまう疾に見留をつけて來ましたから、一向御心配は入らないが、まあ〜これ

を見て下さい、實に緊急な大事件だからと、差出すはこれもまた女文字にて記されたる一通の書状、この度のは先刻のと違ひて男子耻かしき能筆なれど、如何なる身上の人のものせしにや、炭のかけもて記されたり。

妾ことばおのが身の悪しかりしより、身を棄てて父上に申譯せんものと、わが家を忍出でたるに、吉藏とまうす召使のものに伺ひ知られ、今はこの家のうちに推籠められ居り候哀れはかなき女の身に御座候。この吉藏とまうすはいと悪くむべき悪漢にて、妾が身を棄てんとて川ある方にまゐり候跡より追かけまゐり、妾をはかゝるところに推籠め置き、夜毎にまゐり候ては妾に向ひ無軀の惚慕まうしかけ、一昨夜などはあはや身を穢さるべしとぞんじ候ところ、幸にも吉藏が情婦とやらんが後より跟けまゐりて、この軀を見るより嫉妬の情に絶えかねてや、見るもいまはしきはかりなる大争論をばじめまうし候。その折情婦が申し候種々の雑言の中、不圖耳に入り候はわが本夫とも頼み候へし柳田政雄とまうす人の

叔父上を殺し候は、まつたくこの吉藏の所業のよしに御座候。この事實のありしより妾を推籠候事一入殿しく相なり候は、この悪事の洩れん事を恐れ候ためとぞんじられ候。吉藏事もさすがに妾を犯さんとの心は相絶ち候とど見へ、このたびは妾を西洋へ密賣淫とやらに賣りまうすべしとまうし居り候。いよくそのやうなる事になり候は、もとより惜からぬ命ゆへ、何ともして相果まうすべく候へども、たゞこゝろにかゝるは柳田様の御身の上。これのみ冥途の障と相成まうすべく候。この手紙御拾なされ候御方は何とぞ彼人にわが身の上を御傳聲下されたくひとへにぬんじ上まゐらせ候。ほかにもいろ／＼まうし置きたきもかすく御座候へども、人目をぬすみての事なれば思ふこゝろの千分一のみかきのこしまゐらせ候。何とぞ／＼この手紙哀れふかき御方の手に入りて、この身の上を哀と思し玉ばらは、柳田さまに御傳聞下されたくせちに願上まいらせ候。柳田さま御宿所は本郷森川町十六番地椿とまうす下宿屋

に御座候。くりかへしくこの手紙の哀知れる人の手に入らんこと、惠ふかき御神に祈りまいらせ候。父の耻辱ともなり候事ゆへ名は記さず候へども柳田さまに御傳聞下され候へは、勿論御承知に御座候。满腔の遺恨、悲歎、口惜さはこの一枚の紙の上に記されて、血の涙に咽びたりしその様の想像らるゝに、吉田探偵は默然として暫時は手紙を繰返してのみありたるに、氣逸やの無聲居士は焦燥ちはじめ、(吉田先生、この手紙の容子では文子嬢は何時如何な事があるかも知れない。さあこれから即時に出掛けて救つて遣つて呉れ玉へ、さあ／＼そんなに緩々して居る時ではないじゃあないか)と迫ぎ立つれども毫も騒がで、(さう騒いだ處で詮方があるものじゃあない、一躰これを何處で拾つて來られた。無(さう)落着いて居られると愈々此方が自裂て來るが、併しいふだけいはなければ此方の相談に乗つても呉れまいから詮方がない。實は先刻先生の命令を聞いて直吉藏の詮議をはじめると、野郎は風野家を出るとそれから根岸の方へ行

つたといふ話をちらりと聞いたから、所々方々で聞いては彼方此方と殆んど根岸中を軒別に捜すやうにしてたづねて見たが、毫も手懸がないので失望して、屠所の羊よりも意氣地がなく、ぶらり〜と來かよつたのは新坂の曲り角、何とも知れず二階家の窓から、僕の天頭をかすつて落ちたものがあるから、何物ならんと拾つて見ると立派な銀簪、それに捲付けてあつたのが即ちこの手紙だから實に驚ろいて仕舞たのさ。すぐに其家へ踏込んで令嬢を連れて來やうかとは思つたが、萬一彼方が強い奴で、遣り損なほうものなら、法返しがつかないからと眼を瞑つて、先生の許へ相談に行くと、先生は居ないといふのさ。何處へ行つたかど聞くと行先が分らないといふから、困つたものだとは思つても尋ねて行く目的はなし、實は一人で爵いで居た所さ。さふむ、成程、それで容子は太抵分つたが、この文字は令嬢の書いたに相違ないかね。無それは勿論さ、文字はかりではない。この銀簪の定紋も風野家の紋所だ。さいよく〜それに相違なければ徐々令嬢

取戻にかよつてもよいが、併しもう何時かね、うむまだ九時か、では先生御苦勞だが、一ツ談判に行つて戴かうか。無え〜！僕に〜それは否けないよ。孰れ他の娘をあつして推籠て置かうといふ奴だから、如何して應それと返してよこす理由はない、そうなつて來ると逆も僕では使命を全うして歸るといふ首尾には行くまいと思ふよ。さうごねてしまつたからでは事が面倒だから一ツ先生の御出張を煩はしたいね。さ行くのは譯はないが毫私に思考もあるから、是非一應先生に談判を願うとに致しませうと、何といふとも聞入れぬに、無聲居士も我を折りて覺束なくも立向へぬ。程遠からぬ道程を急ぎにせかせし車轍の歩行いと速く、新坂の上り口なる例の家の前に棍棒はびたと下りぬ。無聲居士は車を下りて家内に入り案内を乞へば、出で來りしは年齢六十有餘と覺しき老人にて、(何處より御越になりましたか)と、ちろりと見上しその眼中、何となく殺氣を含みて一癖あるへき面魂なり。小氣味悪き奴とは思ひながら此方もさる者、何氣なき

その十七

体にて（立關にては御話も出来ねは）と、無遠慮にいへば、彼方は軽くうけて、（いやこれは失禮を致しました、さあ如何か此方へ御入來下されたい）。

表面は何處までも眞面目らしき應對あり、悪く下部から出て慇懃なるは、心の針を包む老爺が陥穽、迂濶と陥つては飛んだ運命に逢ふべしと、無聲居士は種々に畫く胸間の思案に屈托して默然としてあるに、彼方は宛然待遠しけなる面地して、（何ぞ御用で御坐いますなら、餘り遅くなりません中に伺ひましやう）と毒を含みし老爺が語に、無聲居士もムツとして（斯様に遅くなつてから訪つたのは眞實に御氣の毒では御坐るが、御相談はかへつて夜分の方が世間が懊惱なくなつてよからうと思つて参つたのさ。時に相談といふのは他じやあないが、私は此方に御世話になつて居る娘の親類だがね、今日漸く此方に居るといふとを衝止めて迎に來ましたのさ。永々

御世話になつた御禮は屹度十分に致しますから、何卒娘を出して下さいな、ね老爺。（何の御話か些少も解らないが、その御嬢様といふのは何家の御嬢でございますか。）老爺、そんなに不知はつくれるにも當らないじやないか、自己の方には悉皆材料が上つてゐるんだから。（不知はつくれるの、何のつて飛んでもない事を仰有います。では何ですか、その嬢様といふのが私の許に居らつしやると仰有るのですか。）言ふも言はぬもあるものか、現在この自己が黒い眼で睨んで置いたのだ。（黒いか白いかはぞんじませんが、それは貴君の御誤謬です。こんな穢汚しい家へそんな嬢様などの行らつしやる譯がありません。）（そんな甘口で乗せられる自己じやあないぞ、吉藏が和郎の許へ脚え込だのも、悉皆知つてゐるのだ、柔しく出して呉れりやあ、此方でも悪くはしないから、黙つて歸してもらひたいね。）老爺（貴君は何だか一人で威張つて居らつしやるが、私には一向記憶のない事で御挨拶の致しやうがありません、このやうな馬鹿正直な老爺で御坐い

ますもの、そんな御嬢様が居らつしやいますのなら、御禮も何も入りますものか、早速御渡まうしましやうけれど、如何もない袖は振られぬ警諭……。黙つて聞いて居れば言ひたい放題の熱を吹くじやあないか、如何でもどう剛情な事をいふなら詮方がない、家探しても索ね出すぞ。

最初は處女よりも柔しき老爺、家内探索の聲を聞くとそのまゝ、面色俄かに凄酸を帯び、老爺（家内搜索）こりやあ面白い、汚ない家内だがこれでも自己の城廓だ、手前達のやうな青二才にそんな事をされて堪るものか。もう手前達にやあ用がないから出て亡しやあがれ。語と共に襟髪に手のかゝるよと思ふ間もなく、無聲居士の身軀は手鞠の如く、戸外へこそは投出されぬ。

暫時は投出されしまゝにて起きもえやらぬ無聲居士は、漸くにして起き上り、恨めしげに二階の上を見かへりながらも、わが手一つにては奈何にも詮術なきに、兎にも角にもかの吉田に相談なしてその上の事にせんものと、責えかへる胸間を推しづめ、吉田が家へと急ぎけり。

無聲居士を掴み出したる彼老爺は、無聲居士の後姿の見えずなるまで見送りて、(野郎何處で嗅ぎ付けて來やあがつたか知ら、今は此方の見暮に嚇かされて歸るとは歸つたが、今夜の中にも報警に來ぬいともいはれぬいから、詮方がねい、これから玉を吉阿兄の方へ送るとしやうか。併し迂濶戸外へ連れだして騒がれでもしては大變だから、猿轡をよく締めて車へ乗けて連れて行くとしやうか。かういふ時にやあ、裏の權の野郎は都合が善いて、金さへ掴ませりやあ何でもしやあがるからな。では權の野郎の車を頼むとしやうか。

類を以て集る悪人原、かのお文嬢をは車の中に縛りつけ、布衣をは深く掩ひつゝ他目には普通の人力車と見せて、彼大悪人吉藏が許に運去らんとする其有様は、宛然鷹に捉られし小雀の哀れ果敢なき風情なり。

車はやがてとある家の前にとゞまりて、附添え居たりし老爺が何やら二

言三言いふやうなりしが、間もなく戸の透間よりらんぶの灯影の微かに洩れて、(老爺か、今頃何しに來たのだ)といふは確然に吉藏の聲なり。(何しに處ではない、ちと面倒な事が起りかゝつたんだから遣つて來たのだ、まあ此所を明けてくんねい)といふ老爺の言の下に、表の戸は開きて三人の姿は家裡に入りて、須臾は聲もなし。

嗚呼不幸とも不運ともいふ術知らぬばかり哀果敢なきは、お文嬢の身上かな。かの落し文の幸に己を救はんとする人の手に落ちて、最早自由の身上となりなんとしたるに、何事ぞふたゝびかゝる處に推籠らるゝこととなりては、誰かはこゝにあるとを知りて救護に來る人のあるべき、實に果敢なきは文子嬢の身上なりかし。

文子嬢を昇き入れし吉藏が家裡は、須臾が程は潜々と語り合ふ人聲すらも外部には洩れぬばかり、いと静寂としてありたりしが、尙ほ二三分も経ちたらんと思ふ頃、突然に起る烈しき物音、打つ音、蹴る音、轉び合ふ音、

靴の響佩劍の響と打まじりて、家内は今にも崩れんばかりの大騒動。やがて一層烈しき物音して、二階の窓を蹴開きて、裏庭へ飛下りしものあり。飛下りさまに身を浮かして駆け出ださんとする後部より、(吉藏御用だ、観念しろ)とむんづとはかり組付しは、名譽の探偵吉田梅太郎なり。

流石の吉藏も不意を打たれて吃驚せしか、二足三足引戻されしが、忽ちにして懷中に呑み居たる短刀を抜くより早く、左の手に持ちかへて、縦横無盡滅多衝に吉田を目がけて衝きかくるを、身をかわしたる吉田探偵、虚空を衝かせて敵の手元に近よりつ、利手を取りて一肩入るゝと見えたりしが、もんどり打つて吉藏は二三間彼方に投げ出され、起上らんとする間もなく、両手は背部に廻されぬ。

折しも家内の騒動も静まりて、かの老爺と權と呼はるゝ二人の悪漢も、高小手に縛しめられて、二階の柱に括りつけられ首投げ出して、力なげに萎はれかゝりぬ。

吉田探偵が如何にして彼等をかく手もなく捕縛するにいたりしか、讀者諸君はいと訝かしく思はるゝならんが、吉田探偵は文子嬢の在所を聞くとき、直ちにその家を搜索しても文子嬢を取戻さんかとは思ひしかど、かくと聞かほかの吉藏は露顯の端緒と風を喰らつて逃げ去らんも計られねばど、忽地一計を案じ出し、まづ無聲居士を遣りて談判せしめん、先方もさるもの固より應それとかへしよとさん答はなし、到底は無聲居士を逐ひかへして、さてその後文子嬢を何所にか隠さんとするなるべし。されどこれとても突然の事なれば吉藏が方に連れ行くは必定なり、われその後部より跟け行きて、たゞ一網に彼等を捕縛りて、文子嬢をも取かへさんと、無聲居士を出し遣りたるその後、おのれも彼家の裏口に忍び居て、一伍一什を偷聞せし上、彼等が跡を跟け行きて、吉藏が家に入りしを見よりもかねて謀し合せし警官をは家のうちに亂入せしめ、その身はかゝる事もあらんかと裏庭に身を潜めて、さてこそこの大兇賊を捕縛するに至りしなれ。

大團圓

検事が嚴明なる取調と吉田探偵が精密なる證據には、流石奸智に長けたる吉藏も今ははや言免れんやうもなく、終に曲木お竹を殺害せし旨を白狀したるに、隠し蔽せし尻のそれよりそれと割れて、かの柳田重藏を殺害したるも自己なりしよしをは落點もなく白狀に及びぬ。

吉田探偵が推察せし如く、お竹吉藏の兩人は久しき以前より怪しき交情となり居たるにて、兩人共に下腹に毛のなき老狸輩なりしかは、かの兇行のありし前日、お竹は重藏が大金を携へて出京する由の報知を得たるに、時こそ來れど彼吉藏と共謀して奪取らんとしたりしが、自己が家内に在る時にては、その身にも嫌疑を受くる恐怖のなきにあらねば、自己の不在の間に吉藏を忍び入らしめむ手筈なりしに、折しも彼政雄の訪ひ來りて重藏との間に激しき爭論をはじめたるに、これぞ幸福！此奴に罪を塗抹けんも

のと、さてこそお三を連れて買物にとて出でたるなりしが、お三には鼻薬を與えて今宵は歸るに及ばずと有難き語に、お三は深き計畫のありとも知らねば、天にも昇らん心地して上を見倣ふ下司同士の情夫の許へ行きたる跡にて、その身はかの吉藏と謀し合せし約束の場所にて、家内の首尾を語り合ひ、政雄の立ち去るを待ち受けて、重藏を殺害し大金を奪ひ取りたるにて、兇行の用に供したる手術刀の如きも自己等の罪蹟を推隠さんためにとて、重藏が所持の品を用ゐたりしなり。

さるを不幸にも柳田政雄は我が情人の名譽を重んじて、歸宅の時間を曖昧になしたりしたため、豫測なき災禍の淵に沈みて、彼が申立はみな嫌疑を招く基因とこそばなりしなれ。

さてまた曲木お竹が吉藏の爲めに横死を遂るに至りしは何故かといふに、吉藏お竹の兩人は餘炎の冷むるを待ちて、何處へか身を躲し、晴れて世帯を有たんと約束なりしに、かの吉藏は風野の令嬢の邸を逃出すを窺ひ知

りて、跡をば追ひて途中より拘引し、同氣求むる吉助といふ彼悪命の許に預けてよりは、何とかして令嬢をば我物にせんものと思ふにつけて、お竹の事は忘るゝやうになり行きて、餘炎のさむるまでは遠々しくせんと相互の身の安全なるべしと、自己にのみ都合よき口實を、最初のほどはそれもさうかと思ひ居たりし曲木お竹も、根が其道には拔目なき婦人の事とて、訝しき容子と窃かに探り居るとも知らぬ吉藏は、一夜の事今宵こそ強迫にして風野令嬢を従がはせんものと、吉助老爺の許に行きたるに、跡を跟け居しかのお竹は、かくと見るより嫉妬に心も取亂れてか、薄情男よ、性悪者よ、大事の人と思へばこそ、生命を賭けて殺人犯の手引までもなしたるに、今となりて他婦人に見かへられては、生存へ居らん甲斐もあらざれば、われは潔よく自首して出で其方と共に處刑を受けんなど、近隣を憚かる心もなく、思ふさま聲高にいひのゝしるにぞ、かくては大事の秘密のこの婦人より漏れんも計られねば、寧の腐臭生命を止めて遣らんものと、暴

悪非道の吉藏は埋め置きたる金子を掘り來らんとて、お竹をは窃かに彼の兇行の場處、谷中の墓地に伴ひ行きて、人知れず刺殺したる所存なりしに、天網如何でかかゝる大悪人を容すべき、死骸の側に落し置きたる烟草入、その身の左手利なる事をあらはしたる出刃庖丁の柄につきたる指痕など、の證據となりて、お竹を殺せし事の露顯せしのみか、お竹を殺すに至りたる事情と、烟草入に入れ置きたるお竹が手紙、さては例の左手利が二重の證據となりてかの重藏を殺したる罪までをも露さるゝに至りけり。

かく正眞の犯罪人の瞭然になりたりしかば、その拘引せられてよりこゝに一週日の餘、憂愁の雲霧の裡に鎖されし柳田政雄は、吉田探偵の盡力と無聲居士が好意とによりて、再度長閑き春の空を仰ぎ見るに至りたり。

文子嬢は無聲居士に送られてわが家にかへりしが、父の定友も一度は失ひしと思ひし愛娘の恙もなく歸來しに、その歡喜は譬へんやうなく、この事件のために端なくも文子嬢と柳田との交情は誰人知らぬ人なきまでにな

りたりしと、かの政雄が平素勉強家にして君子とも稱へらるゝほどの今珍らしき壯俊なるのみか、その身は危急に迫りながら、情人の名譽を重んじたりし其誠心とにいたくも感じ入りて、遂に兩人の結婚を承諾したり。兩人が身上かく定まる上は月下氷人なる乳母のお松のみが黜ぞけらるゝ理由のなければ、これも以前の如く文子嬢の側にありて、篤實しく働き居るとぞ。

吉田探偵はこの事件の落着いたりし後幾日もなく、探偵長の榮職に上りたりしが、これと同時に早川探偵はその職を免ぜられぬ。何故に免職せられしかば、探偵長と警部長の他に知る人のある筈なけれど、かの吉田探偵の許に送られし二通の無名の書状は早川の手より出でたるにて、吉田が名聲の日に月に隆盛なるを心安からず思ひて、かの手紙にて吉田を迷はせ、その間に乘じて自己が功をは立てんとしたる事の漏れたるにぞ、さてこそ今回免職せらるゝに至りしなれとの噂、其道の人々の間にとりゝなるは

本体なくしての影にはあらざるべし。
 嗚呼人世の倚みかたなきは、秋の空冬の雲朝に變り夕に移るやうなれど、
 尙其中に一貫かざるどころなき、善に與し惡を憎む天の意は、政雄文字
 の幸福と吉藏お竹等の行末を鑑みて明明白なるべし。
 筆を擱くにあたりてわれは諸君に白狀せん、この波起瀾伏定りなき事實の
 顛末を諸君の前に記出したるわれは、實はこの事實に關係ある秋山無聲居
 士なり。さればわれはこの事實を小説として諸君の前に薦めんよりは、寧
 ろわが過去の歴史の一部として薦めまほしと思ふ。

ひたりきゝ終

探偵小説

- 一集 十文 百兩 電氣の死刑
- 二集 十文 百兩 電氣の死刑
- 三集 十文 百兩 電氣の死刑
- 四集 十文 百兩 電氣の死刑
- 五集 十文 百兩 電氣の死刑
- 六集 十文 百兩 電氣の死刑
- 七集 十文 百兩 電氣の死刑
- 八集 十文 百兩 電氣の死刑
- 九集 十文 百兩 電氣の死刑
- 十集 十文 百兩 電氣の死刑
- 十一集 十文 百兩 電氣の死刑
- 十二集 十文 百兩 電氣の死刑
- 十三集 十文 百兩 電氣の死刑
- 十四集 十文 百兩 電氣の死刑
- 十五集 十文 百兩 電氣の死刑

宛錢十共税郵價實切讀冊一シナ本欠リヨ集一

定價

一冊七錢十冊前金六十五錢
 廿冊前金壹圓廿錢郵稅四錢宛
 本會は毎月二回發行す、一切前金に非ざれば發送せず、代金御
 同送の節は内國通運早送便又は日本橋通り郵便局へ御振込被
 下度郵券代用一割増前金相切れ候はゞ直に遞送見合せ申すべ
 し見本は郵券十錢にて遞送すべし

明治廿六年一月十日内務省許可
 明治廿六年五月二十日印刷
 明治廿六年五月廿二日發行

發行者 和田篤太郎
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者 根岸高光
東京市込區市谷加賀町二丁目二十三番地

發行所 春陽堂
東京日本橋區通四丁目角

電話五拾壹番

印刷所 秀英舎工場
東京市込區市谷加賀町一丁目十二番地
 電話十九番

新編 作 本

杜 世 十 鏡

世 在 假

夷

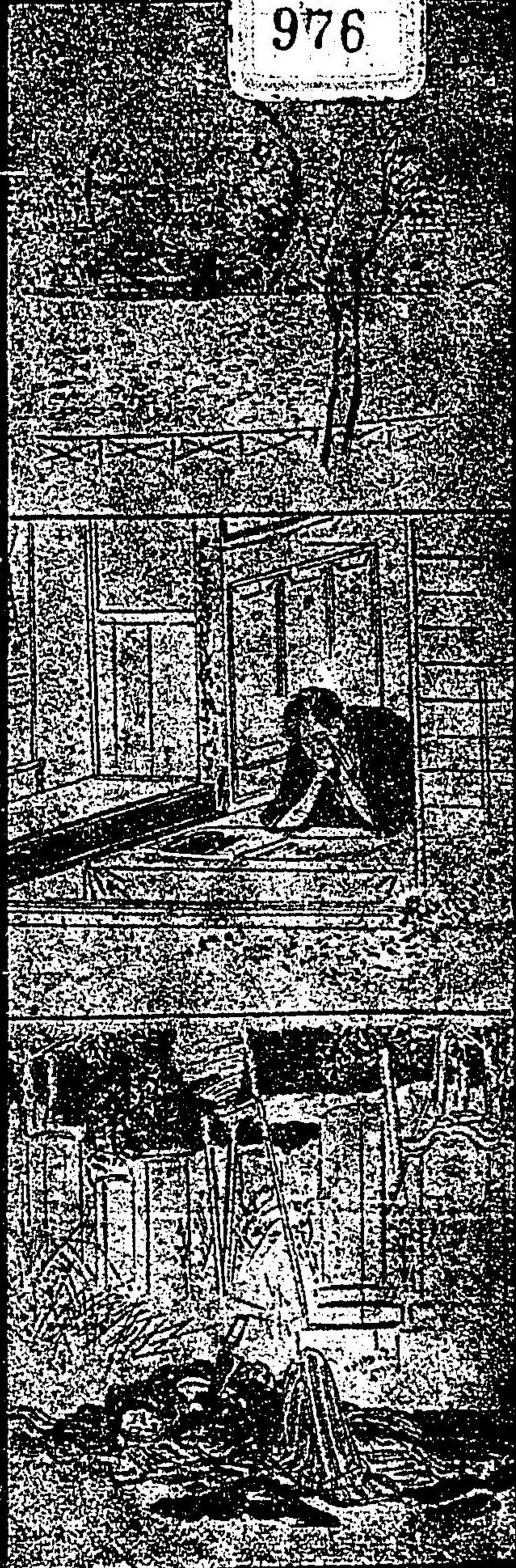
劍

良



特 9
976

探偵小説第十三集
左 三十八



095103-000-6

特9-976

ひだりきき

無声居士/著

M26

DBQ-2711

